

新書解說第二編

15
394



始



15-394

稀書複製
會刊行 稀書解説第二編

例言

一、本編は、稀書複製會第二期の事業として、大正九年七月より同十一年六月に至る二年間に複製したる圖書二十五種の解説を輯録したるものなり。

一、圖書の排列順序は、前編の例に倣ひ、刊本と寫本とに二大別したるのみ、煩瑣なる部門を設けず、種類の相似たるものは相並べて掲げたり。本編のうち、「こんてむつすむんぢ」は林若樹氏の執筆、奈良繪本阿國歌舞妓は藤懸静也氏の寄稿にして、其他は樋口二葉氏の起草に係るものなり。

一、解説は詳細ならんことを期したれども、圖書の種類多方面に互れるを以て、悉さざる所多かるべし。大方の呵正を得ば幸なり。

大正
11. 6. 27
内交

一、本會第二期の事業に就ては、藏書家諸氏の援助に負ふ所多く本編の編纂に就ては、好書家諸氏の垂教を受けたること特に多し。爰に深く感謝の意を表す。

一、第二期の複製に關しては、木版の彫刻は僅に三種を除きて大塚祐次氏を、木版の印刷は阿部鍋五郎氏を、玻璃版の印刷は凌雲堂淺井鐵造、茜尚堂矢吹時中の兩氏を、製本は大成堂山田音七氏を煩したり。

大正十一年六月

稀書複製會

目次

刊本之部

人倫訓蒙圖彙 元祿三年 一

葵月次のおそび 葵川師宣畫 元祿四年 二

魁本對相四言雜字 七

鼠花見 近藤清春畫 (享保) 一〇

いろはたんか (元文) 一二

新風流鱗魚退治 鳥居清倍畫 (享保) 一三

ふきあげ (葵川師宣畫、萬治) 一五

新役者繪盡し 古山師重畫、(元祿) 一八

元祿歌舞伎小唄番附盡 二三

明月餘情 安永六年 二八

11
546

吉原はやり小唄總まくり	三
繪本江戸土産 西村重長畫(寶曆二年)	三四
繪本續江戸土産 鈴木春信畫(明和)	三六
追分繪 珍舍著、等碩畫、(寶永六年)	三八
新花摘 谷口蕪村自筆遺稿刻本。月溪畫	四一
手拭合 山東京傳畫 天明四年	四四
こんてむつす、むんち 慶長十五年	四六
佛說摩訶酒佛抄樂經 龜田鵬齋著、文晁抱一畫	四九

自筆本之部

奈良繪本阿國歌舞妓	五一
戲卅六歌撰櫓色紙 曲亭馬琴	五六
胸算用噓店卸 葛飾北齋	五八

竹齋老實山吹色 築地善交(二世風來山人)	六〇
參海雜誌 渡邊華山	六二
惺々曉齋繪日記 河鍋曉齋	六四
洗張浮世模様 久保田米僊	六六

附 錄

特別 明和劇場圖 中村座	六八
第一期 亂曲揃解説補遺	七〇
稀書複製會第二期趣意書	七三

稀書複製
會刊行 稀書解説第二編

刊本之部

所作入
由來入 人倫訓蒙圖彙

半紙本 七册

本書は元祿三年の刊行にして、書林平樂寺の開板なり。全部七冊にて卷の三の末に「蒔繪師源三郎筆」の署名あり。本書には古くより畫工の署名あるものと、署名なきものとの二板あり。按ふに一は初板にして他は再板ならん歟。「人倫訓蒙圖彙」の夙に珍書として取扱れたるは、當時の世態職別を略ぼ網羅し、元祿前後に於ける風俗を通覽する稀有の志料として、世に重要視せられたる所以なり。されば圖解を主としたる簡易社會辭典とも見るべきものなり。

本書の筆者を蒔繪師源三郎なりと傳へ來れるは、卷の三末尾に唯一ヶ所「蒔繪師源三郎筆」との署名しあるを以てなり。然れども本書七卷が悉く蒔繪師源三郎の筆なりや否やは頗る疑はし。既に此筆者に關しては、水谷不倒氏も雜誌「錦繪」第三十一號所載「西鶴本の挿畫に就て」の中に、人倫訓蒙圖彙に關する所説を掲げ、「此書も亦畫風が二様に別れて同一筆者の筆に成つたものでない事が窺は

れる」と云はれたるはさる事なり。本書の畫圖が同一筆者の手に描かれたるものとは首肯し能はざる點多し。卷の三、一冊だけに特に署名しあれども、其畫圖を他の六冊のそれと對照し見るに、存外拙く尙儂の如く矮軀に畫かれたるものや、素人臭き雅致なき描法のもの多し。概して卷の三に比し卷の四は、人物も豊かに大きく、筆力も寛かに展びたる趣きあり。次の卷の五は、人物も小振りなる上に、稍や跼蹐し嬌屈せる狀あり。これらに據つても署名のある卷の三と、其他と筆者の異なるを察し得べし。猶卷の三の畫と同じき描法のもの、他の卷の中にも往々あり。就中著しきものは卷の七、十七張の與次郎、二十張の住吉踊等その如きは、卷の三の描法と同じく、明かに素人離れのせざるものなり。若し世に傳へられたる如く、此書を源三郎一人の筆とすれば、何故に特に拙劣と見ゆる卷の三にのみ署名したるかを解するに困しむ。一説に、卷の三のみが源三郎の筆にて、他は別人の描きたるものとも云へり。されど斯く解すれば、彼れの畫は甚だ價値なきものと成りぬべし。或は卷の三は助手の筆なりとも云へり。されど是れに據らんか、其署名が甚だ不審に感ぜられざるを得ず。『浮世繪類考』に「西鶴の作の讀本の挿畫名をあらはさざれども多く此人の畫なり」とあれば、水谷氏の「源三郎の挿繪は元祿五年板『世間胸算川』以後に屬す」との説に據り、それ以後の西鶴物を漁り、似通ひたるものあるにしても、署名なければ斷定するに難し。茲には暫く本書の筆者に就て以上の説を列べ置きて、識者の垂教を乞ふのみ。畫の巧拙、筆者の誰たるは暫く措て問はず、斯くの如く纏まりたる資料を遺しくれたる其勞は謝せざるべからず。古くより珍書として取扱

はれたるも宜なり。

本書の筆者と傳へられたる蒔繪師源三郎は姓氏詳かならず。傳ふる所にては奈良の人、夙に蒔繪を業とし、好んで浮世繪風の畫を描き、職業の餘暇丹青に親しみ、元祿年間に於て廣く行はれ、「人倫訓蒙圖彙」と「蒔繪大全」の二書を描けりとあるのみ。『浮世繪類考』には「蒔繪師源三郎、元祿三年刻本人倫訓蒙圖彙に此名あり、西鶴が作の讀本の挿畫に名を著さざれども多くは此人の畫なり」と擧げたり。又新井君美の「退私録」上卷「珠光之事」と題せる條に「茶の湯に名ありし珠光は、淨土宗にて永觀堂の末寺にて南都の稱名寺の僧なりしより仰せあり、天蓋と云所に塗師屋源三郎と云者あり、其家に珠光が所持せし徐鸞が鷲の畫あり見侍りし由云々」とある外に、源三郎の事を記せしものを見ず、猶さる浮世草子中に彼が事跡を記したるものありと聞けど未だ見ず。

全卷を通じて總圖數四百七十餘種あり。これらの被服、調度、持物に至るまで一々仔細に檢し來れば、古雅なるうちに風俗研鑽の助となるもの多し。就中直感を惹く例を示せば、「能藝部」の尺八、一節切を吹奏せる人物のその如き、又御前(替女)の袿を着て三味線を教へ居れるが如き、實に御前と呼ばれけめと面白く、「作業部」の石賣女、乳子買、「商人部」の竹賣の運搬の狀も異様なるべく、焼豆腐を野天にて焼きつ、賣るも奇なり。又蘭奢粉(艶白粉)の當時より流行せし事も、此圖によりて證さるべし。「細工人」と「職人部」とには、職名の現代と異りたるもあり、又珍らしく感ぜらる、ものも多く、説明中には諸職名工の名をも附記したるあり、圖なくして説明のみものも二十餘種

類に及べり。殊に「勸進部」には諸書に引用したる圖もあり参考となるべきもの多し。蓋し筆者が俗間に觸目せしものを主として寫生し、之を分類せしならん歟、各卷に收むるものは左の如し。

〔卷の一〕主として公家、武家、僧侶等に關するもの六十餘圖を收め、別に主なる衣冠、裝束、道具類四十五圖あり。

〔卷の二〕主として藝術に關するものにして、「能藝部」と題し四十圖あり。

〔卷の三〕主として勞働業に關するものにて「作業部」と題し、五十二圖を收む。

〔卷の四〕主として店商ひ、行商等に關するものにて「商人部」と題し、五十三圖を挙げたり。

〔卷の五〕主として諸職に關するものにて「細工人部」と題し、四十九圖あり。

〔卷の六〕第五卷と同種類にして、唯「職之部」と題名を變へしのみなり、收むる所は百四圖に及べり。

〔卷の七〕遊廓に關するもの、演劇に關するものを初めに置き、次に「勸進部」と題して物貰ひに關するものを擧ぐ。合せて七十五圖あり。

本書の複製に關しては、曩に甚だしく原本の體裁を毀損したる複製本の發行あるを以て、裝幀板式等すべての點に寸毫も原本と違はざらんと力めたり。隨て原本に見えたるものは、明かなる誤字と雖も、元の儘に存し置きたり。其例は卷の二、十二張「馬醫」の説明中、唐土の文字の次は儘に彫損じと見らる、も改めず、又卷の四、藥種屋の説明中に見えたる「鳥獸」は正しく「鳥獸」の誤と思は

るれど、其儘に存せり。此類は猶他にもあり。共に原本の面目を改めざるの趣旨に依ればなり。

(原本松濤會文庫藏)

菱川月次のおそび

大本 一冊

本書は江戸の年中行事を畫き、其説明を頭書とせるものなり。奥書に「元祿四年未五月吉日、日本繪師菱河吉兵衛師宣、大傳馬町三町目鱗形屋開板」とあり。師宣の密畫より成る大判二十張のもの。豪華を誇りし元祿時代の風俗活躍し、當時を目睹するが如き感ある、有数の風俗史料の一たり。

卷中の諸圖は元日の柳營登城に始まりて、上下社會の年中行事を盡したるものなるが、中に就て早く其跡を絶ちて、今日の目をもて見れば、殊に珍しく思はる、ものを擧ぐれば、彌生の雛使ひは其一なり。こは正徳頃まで猶ありしもの、如し。次ぎに卯月の降誕會に願人坊主が灌佛を持ち廻りしことは、明曆、萬治の頃よりならんと寶曆板の「街談雜言」に見えたり。幕末までも此錢買ひの餘流は存したりしが、其の姿はいたく卑しくなりたりき。端午に菖蒲武者人形を飾ることは、「一話一言」に收めたる享保六年四月十三日の觸書に、當年限り禁ずる旨見えたり。幟は寛永頃までは悉く紙幟なりきといへば、布となりしは其後なるべし。「五元集」に「郭公幟そめよとす、めけり」といふ句あれば、下々まで布幟を用ふるに至りしは其頃よりならん歟。印地打は元文頃まではありしと見え、元文元年の「口寄車」といふ前句附に「ひかえこそすれく、敵味方沼の匂ひの鉢巻し」といふが

あり。山王祭の大母衣も、其角の句などにも大母衣を詠みたるものあれば、元祿頃まではありきと覺ゆ。孟蘭盆會の靈祭は後世と大差なきやうなれども、願人坊主が施餓鬼の爲大なる器に飯を盛る屋體を昇ぎ歩くは異様なり。また高燈籠は江戸終期までありて、青山百人町邊などには之を掲ぐる家ありたり。今いふ盆踊りの先驅ともいふべき踊くどき、即ち本書十二、十三張なる見通し圖の如きは、上方にては遊里の年中行事に組入れあれども、江戸の遊里にては行はれしことなし。また花火の如きも昔は豪華を競ひたるものなりき。その頃は遊山船へ花火を賣りに來り、客自身にて打揚けしごと圖中に見るが如し。但し享保頃よりは花火を賣うことは尙ありしも、打揚けは花火船に托したりき。さる習はしも可なり長く、今の如くなりしはずつと近代なり。江戸の夷講は京坂より來し商人らが、本店への決算をなし、一年の總勘定の滞りなく済みたるを祝ひしに始まり。元來の江戸的年中行事にてはあらざりき。霜月の顔見世芝居は江戸の創始にして、『役者名物袖日記』に據れば「萬治年中（中略）明石勘三郎工夫、霜月を役者の入替りと相定め、初冬に至りて人氣も時に乘じてひそまるものなれば、萬事遊覽にも人々自然に趣かず、故に別に先案をめぐらし、十月より役者の附紋看板等、其外芝居一黨の格式を相極め、霜月朔日を祝節となし、三芝居に食む族新衣を着し、家内をあらため云々」とあれば、萬治年間より二代目勘三郎に依つて始められしもの、如し。又同月十五日の配當座頭、俗にいふ祝儀座頭、祝儀不祝儀に貴賤の家へ押掛け金を乞ふ舊習は江戸末期まで繼續されたりき。座頭のこととは『當道大記録』等に詳し。尙、最後の頁には餅搗、破魔弓賣、

松飾賣などを畫きて終れり。

一張毎に釐頭に説明を施し、其末尾には必ず俳句を掲出せり。按ふに俳諧の勃興は延寶の頃を始めとすれば、本書の如きも其流行を逐うて俳句を載せしならんか。然れども元祿初期の事なれば、江戸の俳諧も未だ芭蕉の正風なるもの、確定せざりし頃とて、俳調に檀林派趣味を帶ぶる點なしとせず。また以て江戸俳壇の傾向を窺ふ葉ともなるべくや。

本書の原本は歐洲大戰以前に、東京帝國大學附屬圖書館より獨逸ライプツヒに於ける書籍工業及刷畫術萬國博覽會へ出品せられしものにて、或は戰禍の爲に散佚に歸せしならんと推測せられしに、大正十年の春無事に返還されて洋行歸りといふ履歴附の珍書なり。卷中の繪はいふも更なり、題簽に至るまでも毀損せざる完全無缺の原本なり。本會は第一期以來此書の複製を企てながら適當の原本を獲る能はざるを遺憾とせしに、幸に此良本を得て年來の宿望を達したるは、大に欣幸とする所なり。

(原本東京帝國大學附屬圖書館藏)

魁本對相四言雜字

中本 一 册

本書は舊支那の日用單語を輯め、一語毎に其左方に實物の略圖を配したる中本形の冊子にして、初頁標題の次行に「洪武辛亥孟秋吉日金陵王氏勤有書堂新刊」と十字を割書きし、又一張、二張、三張、六張及び八張の五箇所の表匡郭右邊下端に沿ひて「伯壽」の二字を附刻しあり。

洪武辛亥は明の建國より四年目にして、我が後村上天皇建徳二年(紀元二〇三二年)に當れり。按ふに伯壽と附刻したるは明初の人、陳伯壽の氏名を略記したるものならん歟。陳伯壽は明の初め我邦に渡來して洪武十年(我が南朝天授三年即ち紀元二〇三七年)頃には内地に留りて唐本の覆刻に従事し居たりきと云へば、此書或は我が南北朝時代に陳伯壽が明版本を覆刻したるものなどにはあらざる歟、さすれば之を五山版の一種と見るも不可なきが如し。然れども原本の用紙を検するに、南朝時代のものとしては其質稍新しきが如く、寧ろ明曆頃の紙質に近しと見ゆ。すなはち紙質に重きを置いて推測する時は、此書は明曆年間に至りて再び覆刻を試みたるものとも見るを得べく、伯壽の字の如きは單に原版の附刻を襲用したるに過ぎずと見るべく、或はまた陳伯壽の刻板の偶、保存されたるを、明曆頃に至りて再摺したるものとも考へ得らるべし。以上前後の三説果していづれを當れりと爲すべきか。茲には三説を並べて大方の垂教を待たんとす。

刊行年代に關しては如上の疑ひありと雖も、此書が夙に珍書として、諸家の文庫内に愛藏せられたりし事は、押捺せられある藏書印に徴しても明かなり。即ち表紙右下方端に貼附せられたる小箋には、「少府圖書(姫路藩侯酒井氏)の朱印あり、初頁には「葦葭堂藏書印」、「淺草文庫」、「蘿月庵(尾崎雅嘉)の朱印及び「菅氏文庫」の黒印あり、又最終頁には「菅氏文庫」、「昌平阪學問所」の黒印及び「漱芳閣(淺野梅堂)の朱印あり、また欄外下方には「文化甲子」の四字を朱にて印記せり。藏書の先後は今之を判定すること能はざれども、文化元甲子年に昌平叢に藏したりし事は確實なり。蓋し「文

化甲子」の朱字記は他書にも往々見る所の例にして、昌平叢の藏書調査の檢證なり。すなはち天明八年より二十年間昌平叢に教鞭を執りて、文化四年七十四歳にて歿せし柴野栗山は親しく此書を愛玩し、且つ此書を和譯して「對相四言」と題したる小冊子を刊行したりと傳へらる。

本書の内容を検するに、當時支那人が日常目睹しつゝ、ありし各種のもの、例へば書、畫、琴、棋の如き、目、耳、鼻、舌の如き、或は剃刀、摘鬚、燈檠、轎子の如きを四語づ、一句として掲げ、而して各單語に古樸稚拙なる圖畫を對照せしめ、七十七句三百八語を輯録したるものなり。畫圖中に見えたる古風なる剃刀の如きは、今も猶ほ滿洲邊にて使用すると同形のものたり。その形式の現に行はる、西洋剃刀又は安全剃刀と稱するものに似たるも面白し、又摘鬚は現在のピンセットに異ならず。又牙刷とあるものも今の横楊枝に類したり。仔細に看來れば興趣深きもの少しとせず。

本書の原本には磨損したる箇所あれども、幸に文字畫圖を不分明にする程のもの少し。然れども九張裏右下端の「抱」の字は只月偏を遺すのみにて缺損せり。之を他本によりて校正せんとするに、類本なきを以て、「異名類編」卷一を参照して、其服飾の部に「丹鉛總錄」より擧げたる「腹掛」即ち「抱腹」の文字たることをたしかめ、かすかに残存せる月偏に、本書の文字中より其ツクリを求めて之を配合し、辛うじて「腹」の字を製して填補せり。なほ題簽は散逸し居たれば、卷首の文字を以て之を補ひたり。

別に文政四年に刊行の類本あり。これと對照し見るに、この翻刻本は本會の複製本に比して、其

輪廓縦横とも六七分ほど大きく、文字圖畫共に古拙の雅趣を減したり。標題も「新刊四言對相」とあり、其次行に「虎林、胡氏文會堂校正、書坊徐龍峰梓行」と双行に記し、本文は同じく十張にして、第二張と第七張とは入替り、又第八張表の後半よりは上下段とも三言を以て一段とし、これ以下は名目も大差あり。卷末に跋文一葉を添附し左の如く録したり。

頃者家君麓中得一小冊子自天象以至人物器用之末眉列星陳名之與物圖畫無遺不特便於繪事實裨益幼學不少遂摹而刻之視者幸莫以小冊輕之

文政辛巳春十章

谷文二識

これらを見ても本書の古くより好事者間に愛玩されたることを想察し得べし。

(原本松廬舎文庫藏)

鼠花見

中本一冊

本書は近藤助五郎清春筆の丹表紙本なり。外題は頗る大きく、表紙の殆ど半面を塞ぎ、上段には花下酒宴の圖ありて、其下に「鼠花見」と三字大きく、右側に「かくれさとのゆうらん」とあり、而して其下に「さかい町」、左側に「花よりだんごをひくねつみ」、又其下に「中島屋」とあり。開板年月を記せざれど、明かに享保年間の刊行にして、中島屋の出版なれば、第一期刊行の「江戸名所百人一首」と時代も筆者も同じく、古拙味を帯びたる粗畫粗彫面白く、且つ當代の風俗を寫したれば志料

ともすべく、普通赤本と稱するものとは選を異にしたり。

本書は一種の花曆として單行されたるものと見る時は、其古きものに屬するならんか。淺識の我等が見たるもの、中に安永四年の「四時觀錄」といふ一枚摺りあり。また單行されたるものとしては「江戸巡覽」の如きあり。稍や降りては、岡山鳥の「江戸花曆」などあり。此「鼠花見」は數に於ては龜戸、淺草、上野の三ヶ所にして僅々五張物たるに過ぎざれど、享保年間に江戸の花のみを單行物として出だしたる點珍なり。又人物を鼠に見立てたるは、例の鼠の嫁入の變化せしに過ぎざらんか、鼠は繁殖の速かなるものなれば、古來子孫繁昌に比擬する例なり。この書は主として江戸の繁榮を祝福したるものか。

風俗は各種階級を網羅し、茶見世、幕張等の花見の光景をも盡し、年増の女の短き羽織を着て御へ煙管せるものあり。山内に賣る花を、花見る者の一枝づ、翳し行くなど、長閑なりし頃の世世粧といふべし。但し上野山内にて櫻の折枝は古昔より翳がせぬ例なりきといへば、或は此花は遣花ならんか。

筆者清春に就ては、前編「江戸名所百人一首」の解説中にもいひおきしが、其傳は詳ならず。鳥居清信の畫風を慕ひたるものらしと繼に知らる、のみ。但し享保頃には、中村座の繪看板は清春に限られたりと云ひ、また三馬が「金の揮」の書入れに「清春どうけ百首を畫作して後、俄かに兩眼いたみ、竟に盲目となり程なく死せり云々」とあり。其他には所見なし。

本書の古拙なる彫刻趣味を元のまゝに再現するには剝削師最も苦心したり。又題簽は頗る毀損して不明なりしを、林若樹氏の苦心によりて完全なるものとなれり。
(原本林若樹氏藏)

いろはたんか

中本 一冊

本書は此種類の『いろは短歌』中の古きものに屬すべし。紙數は五張より成りて、近藤助五郎清春の筆なるべしと思はる、繪二葉を挿めり。開板年月の元文初年なることは、林若樹氏が『集古會誌』戊申卷二號に『流行歌いろは短歌』の考證ありて明瞭なり。

いろは短歌は古くより行はれしものなるが、享保の初め、幕府が兒童教育に留意し、寺子屋教育を奨勵するに及びて、更に著しき隆盛を見たり。當時、いろは短歌の類は、寺子屋通ひの手習兒が口吟したるものなり。本書の如きは教訓短歌に擬したるもの、一種なるべし。林氏は『集古會誌』に於て、「家藏の黒本にいろは短歌と題するものあり、其内容は夫が、婦の缺點を舉げて生家へ返すことを述べたると、其婦の母これに返歌したると、並びに仲人の仲に立ちて、双方を宥めたるもの、三篇より成れり、當時頗る行れたるものと見え、同じ文句なれど版式違ひたる黒本三本あり、皆江戸版にして、一本には挿繪なく、二本には共に近藤助五郎清春筆と覺しき繪二葉宛挿めり」といはれたり。又『歌舞妓年代記』卷の三、元文四未年の條下の、市村座の『通會我』に、鬼王妹おもん、實は景清の女房が身を賣り、高尾といふ遊女と成り、思ひ掛けなく夫に逢ひて、いろは短歌にて掛け

合ひの臺詞をいふ條を引いて、これを以て見れば、いろは短歌は「元文三年頃いたく流行せしを以て、演劇に仕組みしなるべし(中略)思ふに、其以前より行はれたるものにて、古くより手習兒の口にしたる歌なるべし、これをもぢりて讀賣りとなせしが、いたく行はれて人口に膾炙し、遂に芝居に取りしものなるべし云々」とも云はれたり。

元來本書の如きは一時の玩弄品にして、發行後幾干もなく屑籠に葬らるゝを例とせしものなれば、彫摺共に粗案にて、用紙も亦脆なり。今日まで傳存したるは寧ろ奇とすべく、随つて題簽も散佚し居たれば、假に補製すること、したり。本書の複製には、原本の稚拙なる面目を傳ふる爲に、特に注意を施したり。
(原本林若樹氏藏)

新板 風流鱗魚退治

中本 二冊
上下

本書は鳥居清倍といふ署名添へありて、大傳馬三丁目山本元左衛門その板元なり。刊行年月を記せざれども、筆者によりて推定すれば、享保年間の開板なるべし。作意は平の知盛の亡魂が八大龍王を語らひ、よろづの鱗族を集めて、例の大物の浦に於て、源義經王從に復讐をなさんとすといふ點にあり。赤本もしくは初期の黄表紙と同趣味のものなれども、其表紙の萌黄色なるが本書の特色と言はゞ言ふべく、或は世に稱する『青本』なるものは是等が標本にはあらざる歟。さすれば一の珍重すべき古板本ともいふべし。

元來青本といふ名稱は屢、口にさる、所なれども、普通かく稱せらる、もの、表紙は青からず。是れ好書家の久しく不審とせる所にして、未だ之れに對して徹底的説明を與へたる人のありしを聞かず。在來の諸説を綜合し見るに、曰く、貞享元祿の頃に、赤色表紙のもの出でたり。之を赤本といふ。享保の頃に至りて萌黄表紙のもの出で、晝は烏居風なりき。之を通例青本といふ。次に黒表紙のもの出でき。之を黒本と稱す。後幾許もなく一變し、黄色の表紙のもの出づ。是れ世に稱する黄表紙にして、最も長く流行せり。然れども其後猶青本といふ名稱は殘存し、而もそは黄表紙の前身なりしかば、青本の名稱はいつしか黄表紙の別名なるかの如く考へらる、に至りたり。かの『日本風俗志』などの如きは此説に依據して記述しあり。蓋し黄表紙を一名青本と稱し來れるは、黄表紙の前に青表紙式のものありたりしも、其流行期の短く、隨つて其出版も極めて僅少なりしなるべく、其上、元より粗末なる玩弄本たるに過ぎざりしかば、誰も心して保存などには力めず、破るればやがて紙屑籠に葬られたるべければ、早くも其本體は跡を失し、後世に至りては青本と黄表紙との別曖昧となり、遂には黄表紙の別名とまで混同されしものならん歟。然るに『風流鱗魚退治』の原本を見るに、其稀有なる萌黄表紙といひ、烏居清倍の未だ圓熟せざりし頃の筆致といひ、たしかに享保年間の開板と思はる、點といひ、青本なるもの、根本らしく考へらる。以上主として林若樹氏の考説に據る。

烏居清倍は庄三郎と稱し、烏居家の祖たる清元を祖父として、清信を父とせる、同派の三代目な

り。主として劇場の看板其他劇に關するものを畫きて家の畫系を傳へたり。『骨董集』には元祿の末より筆を執るとあれども、寶永三年に生れて寶曆十三年、五十八歳にて歿したるなれば、元祿の末頃には未出生なりしなり。享保九年、十九歳にて妻帯し、二十四歳の時父に別れたり。按ふに其手腕の固まりて一本立の畫家となりしは其頃なるべし。盛時は寶曆年間なること『烏居派代々小傳』に見えたり。其筆跡等より推すに、本書の刊行は享保年間なるべし。とにかく本書の筆致は其家系の純粹を發揮したるものにて、畫中の人物には時の俳優の似顔らしく思はる、もの往々あり。特に明瞭なるは五丁目裏の龜井六郎にして、こは二代目團十郎のそれなるべし。

本書の内容の他書に異なるは、最後の二頁に卷中出現の鱗族を子となし、辨慶を親として十六むさしに組立て、之を切抜きて兒童の遊戲用に工夫しあることなり。而して是れ此種の繪本が玩具として取扱はれたる證據なり。其保存されざりしも當然ならずや。然るに斯く完全なる一本の現存せるは洵に珍とすべし。原本には五張目表面の下端に少しく破損の箇所あり、されども敢てこれを補足せず原形を存し置きたり。

(原本林若樹氏藏)

ふ き あ げ

中 本 一 冊

本書は『淨瑠璃十二段草子』の終りの二章、吹上の段と御曹子東下りの段とを題材として、これを六段に敷衍して綴れる古淨瑠璃本にして、菱川師宣の畫と稱する挿繪あり。而して卷末には「右之

本者江戸長門掾正本に而合板行者也」とあり。すなはち『聲曲類纂』に其一部を掲出せる長門掾藤原爲英の正本にて、類本極めて稀なれば、珍本として推薦するに足る。刊行年月は記せざれども萬治寛文頃の開板なるべし。

『十二段草子』は三段に大別さる。初めは淨瑠璃姫の生立由來、中は矢矧の長者館にての姫と牛若丸との情事、終りは吹上の濱なり。全體の結構より云へば、吹上の段は蛇足の如くなれども、此淨瑠璃はもと傳説を材として仕組みたるもの、如くなれば、かゝる蛇足に類する筋も、作られし當時は眼目なりしかも知れず。すなはち如何なる英雄俊傑も人間以上の力(神佛)の擁護に因るといふ、お伽話の紋切形を吹上の段に句はせたるものならんかとも思はる。さもあれ、それらを一々に考證せんとすれば、管々しきにわたるべければ省略す。但し單に操芝居の舞臺効果の上より見るも、其主眼らしく見ゆる矢矧の館の段よりも、吹上の段の方が目に訴へて面白味一倍なるべきを覺ゆ。されば長門掾が題材を『十二段草子』に採りつゝも、興味の少き矢矧の館の段を棄て、吹上に注目せしは、興趣に重きを置きし結果なるべし。所謂語り物が平家琵琶より説教節に推移し、やがて再轉して淨瑠璃になりし迄には、多くの歳月を閲せしなり。初めはかの假名物語の影響によりて王朝文學の傳統を承受し、主として貴族や武人の事を題材としたりしが、おひゞ其單調に飽きし結果、本筋の武家談より岐路の世話談に轉ずるに及んで新しき文學を胚胎し、平民的に傾向し、從來は英雄として只いかめしくのみ取扱はれし牛若丸も、柔弱なる戀に惱める美少年とするに至りき。本書の

如き亦然り。『十二段草子』には其病狀を「一日は旅の疲れ二日は神やみ三日は病氣に伏し給ひける」とせしを、本書にては「一日は旅の疲れ二日はきやく、三日は戀疾み」と打附けにいへり。きやくいは瘧疾にして、えやみ、疫癘なるべし。醫學上よりの見解にはあらざらんが、古來疫癘に罹れる者は一旦必ず死す、但し長く鬼籍に入る者と、やがて蘇生する者とありと信ぜられたり。もつとも其病威の猛烈なるを恐れたるらしく、戰記物などに「天魔疫神も敵し難し」と形容せり。就中明暦度以後此疫癘屢流行したれば世舉げて震駭せり。本書はそれを當込みたるものならん。本書とは内容を異にすれども、萬治、寛文頃の所謂金平淨瑠璃などにも其頃流行せし疫癘を取入れたる作意のものあり。按ふに時の流行を取込むは歴史物を過去世より懸け離して現時に近づくる手段なり。長者の姫が戀にあこがれて迷ひ出づる件なども、亦時代物を世話的に取扱はんとする傾向を示す。すなはち後の道行振りの發達を促し、一端とも思ひ得らる。

本書の作者長門掾は俗稱も傳記も不明なり。菊岡沾涼の『近代世事談』には丹後太夫、長門太夫、丹波太夫、源太夫の四人を、薩摩淨雲門下の四天王といひ、原武太夫の『江戸節根元集』には杉山丹後掾の門弟なりと云へり。一説には『世事談』は淨雲系統に偏する書なれば是れを以て確證とは爲し難し。又杉山丹後掾を淨雲門下とするにも異説あり。丹後掾は淨雲の先輩なりとも云へば、長門掾を丹後掾の門下といふ『根元集』の説は輕視すべからず。又長門掾の掾號受領は『鰐房卿記』に「明暦二丙申年十月十日藤原爲英任長門掾」とあれば疑ふ餘地更になし。然れば江戸に於ける掾號受領者

の中にては早き方なりき。

又挿畫は菱川師宣の若描きなりと、一般に此種の畫風の畫を稱せり。師宣の名、世に出でしは、延寶末より天和にある事、天和三年板『みなし栗』に其角の「山城の吉彌結びも松にこそ」に嵐雪の「菱川やうの吾妻佛」と附け居るにて明瞭なり。此種の畫を師宣と稱すれども、『浮世繪類考追考』の菱川系譜によれば、師宣は正徳年中七十餘にて歿せり、本書刊行を萬治寛文とすれば、師宣は漸く廿歳代なり、殊に初め繕箔を業とし上繪より畫き覺えて畫匠となりし人と云へば、此頃一本立ちの畫匠なりしや疑ひなき能はず。

本書の本文は完備したれど、表紙は夙に改幀されて題簽なし。依つて本文中の文字を假用して新に題簽を作ると共に表紙も其頃の類本を參酌して新製せり。

(原本岩崎文庫藏)

新 役者繪盡し

大本 二三 冊
上中下

本書は序文も跋文もなく、開板年月も板元も記さず、唯二ノ卷の九張表に畫かれたる衝立の中に「大和繪菱川葉師重圖」とあるに依りて、菱川派初期の名匠古山師重の筆たることを判斷し得るのみ。其内容を考證して漸く開板年月は元祿八年以前ならんと推定し得たり。

さて最初の刊行を元祿八年以前と推定したるは、元祿八年板の『役者大鑑』に本書の一ノ卷に出でたる生島半六は呼名を杉山半六と、三ノ卷に出でたる野田内藏之丞は生島新五郎と、松本左源太は

花車方松本吉左衛門と改めをり、又一ノ卷に出でたる小松小十郎も元祿板の『雷評判』には玉松小重郎と改名し居れるに據れるなり。

元來師重の繪本は甚だ少く、特に本書に於けるが如く暢達の筆に多數の人物を描きたるは類例なし。『聲曲類纂』には四ノ卷の手遣ひ人形に關する部分十張を轉載し、欄外に「以下十丁は書名知れず、江戸歌舞妓並操芝居物眞似等を書きたる貞享元祿の頃の繪本なり」と附記したり。又浮世繪研究に熱心なる一外人が、この書の斷片と思はる、數葉を愛藏し、欣賞措く能はざりしとも傳へられ、又東京の某書林が嘗てこの書の零本を所有したりとも聞きたれども、今は其所在を尋ぬるの道なし。此書を複製するに當りて百方訪搜したるに拘はらず、遂に對照すべき別本を見る能はざりしは遺憾の極なれども、此事實は此書が今日に在りて眞に稀觀の珍本たることを證するに足らん。

本書の書名は『聲曲類纂』には「明かならず」と記したりしが、河竹氏所藏の合綴本の現存するに依りて判明することを得たり。河竹本は其内容四卷より成り、其表紙の裏面に、上、中、下三葉の完全なる題簽を貼附しあり、三葉いづれも其中央に大きく「新板役者繪盡し」とありて、上冊には其右傍に淨瑠璃座、左傍に説教座、中冊には右傍に市村座、左傍に中村座、下冊には右傍に山村座、左傍に森田座と細字にて副書しあれども、内容と題簽とは符合せず。即ち市村、中村の兩座を上冊(一ノ卷、二ノ卷)とし、山村、森田の兩座を中冊(三ノ卷)とし淨瑠璃、説教の兩座を下冊(四ノ卷)に收めたるは、多少疑點なきにしもあらねど、按ふに是等は最初より上中下の三冊として出版したるにあ

らずして、随時に幾張宛かを刊行しつゝ、後に繼合せて各巻に纏め、中央柱の文字及び張数の如きも入木したるものならん歟。又、二ノ巻十二張裏の畫は、四ノ巻二十三張裏と續き、又四ノ巻二十四張の表と裏とは共に見通しにすべき畫面なるが如し。猶、鼈頭の臺詞にも刪り去れるものあるが如し。又同じ四ノ巻十六張より二十二張までは張附けに於ては脱落し居れど、此間十五張より二十三張に互る畫面及び鼈頭の臺詞は接續するらしくも思はる。すなはち以上の諸點を綜合し來れば、愈、以て上中下に取纏めて出版したるは、原版刊行後數年ならん歟と考へらる。然るに畫面及鼈頭の臺詞に於ては連續し、張附に於ては脱落せる四ノ巻も、他の巻の例と同じ形式に依りて、その一張の表に全面「八重垣雲の絶間」の臺詞を載せ、同裏の鼈頭より三ノ巻の「さくらの御前」の臺詞を續けたり。この巻首の臺詞の題號を直に書名の如く取扱ひたる、「八重垣くものたへま」と稱する一本、大阪の素封家平瀬氏の秘篋中にありと聞き、正に本書の下冊即ち四ノ巻に該當すべく思はれ、彼此相對照して以て完璧たらしめんことを希ひたりしも、平瀬本は他の藏書中に紛れ込みたる由にて、竟に發見せらるゝに至らざりき。

本書の鼈頭に物真似狂言盡しの臺詞を其儘書抜きたるは、遠く鸚鵡石の濫觴をなすものとも見られて面白し。又、畫面としては、三ノ巻に元祿頃に至りては最早や京阪には影を止めずして、只江戸にのみ残りたるらしき「脇踊」の圖のあるも面白し。猶「狂言足揃之次第」といふがあり。是昔の舞臺稽古にして後の申合せと云へるものなるべくや。此圖の中央には一人隠居然たる人物ありて、其

側に定右衛門といふ名札を添へたり。是れは元祿十六年板の「小栗十二段」に「親方の部上」とある田村定右衛門にして、當時劇界に於けるキケ者なりき。又市川團十郎の舞臺に、最も大きく「丹前開山市川團十郎」の懸札したる所の圖もあり。又元祿の法令に依りて其月代の著く廣けられたる頃の面影も窺はれたり。四ノ巻には森田座に於ける花樂の十二人藝の圖あり。斯かる藝を所作として勤めしは珍らし。元祿六年板の「芝居百人一首」の作屋九兵衛の條に、前略「それよく、八人藝の所作今見る如くで、此人の後花樂といふ座頭の坊主、森田座にてしたる外役者の内にて、其役を勤めたる者なければ、一入珍らしき所作なり、それよりこのかた拍子木はあれど、又するものなし、云々」と見えたり。猶、猿芝居や放下師を舞臺へ掛けたるも異様に思はる。其放下師、飛龍勝之丞、龍王連之丞の如きは、延寶九年板の「堺町葺屋町圖」にも轉載せる「卒藝古雅志」にある當時の名人なりと云へり。其他仔細に檢すれば、參考となるべきもの尠なからず。

以上列記したる如く本書に於て二三條の疑問あり。即ち其外題の傍書には、上册「上り座説教座」とありて内容は市村、中村の兩座なり。中册「市村座中村座」とありて内容は山村、森田の兩座なり。下册「山村座森田座」とありて内容は上瑠璃座と説教座の事を記する如き、是れ一つ。四の巻廿三張裏と見通しになるべき圖が二の巻十二張裏に收められたるが如き、是れ二つ。四の巻十五張より七枚を脱して直ちに廿三張に續きながら、畫面も鼈頭の詞句も其間に遺漏ありとも思はれざるが如き、是れ三つ。是等はいづれも此書の編成鹽梅に多少の錯綜あるを示すものなり。或はいふ、

平瀬本には、巻尾に延寶の年號ありと。果して然りとせば、此四の巻は延寶の頃に單行せられたりしを、後に芝居四座に關する部分を合せて改板するに臨みて、偶々畫面の挿入を誤りしにあらざる歟。又取急ぎて内容と外題との一致せざることに心付かざりしにあらざる歟。張附けの間違ひは古き刊本には往々にして見る所なるが、此卷にての如く七張も飛ばしたるは稀なり。姑く疑を存して大方の教を待つ。

筆者古山師重は其傳詳かならざれども、『浮世繪類考追考』に載せたる『菱州氏系譜』に據れば、師宣門人三人の中の師重は、「元祿中の人、江戸長谷川町に住す、古山は本姓なるべし」とあり。猶、元祿二年板の『江戸圖鑑綱目』浮世繪師の一節には、師宣、師房の次に「長谷川町古山太郎兵衛師重」とあり。また、元祿五年板の『買物調方三合集覽』には江戸浮世繪師として、菱川吉兵衛、同吉左衛門、同太郎兵衛の三人を挙げたり。太郎兵衛は即ち古山師重なり。又『骨董集』には、板行の一枚繪を叙したる條下に、「當時丹綠青などにてまだらに彩色したるは、菱川師宣、古山師重等これを畫けり」とあり。又菊岡沾涼の草稿なりと傳へらる、六枚綴の斷片中に「古山太郎兵衛師重は元祿頃の人、江戸長谷川町に住し、四座の役者繪本、吉原源氏の二書名高けれども甚だ稀れなり」とあれば、四座の役者繪本とは此「役者繪盡し」のことにてはあらざるか。何れにしても、師重は菱川派中の巨匠として、古くより世に重んぜられし畫家なるべし。

畫頭なる臺詞の中、三ノ卷の六張裏の十六行目のう、つ、の下、十一張の裏十一行目思へばの下、

十二張の表十三行目さて、人の下の文字は、三ヶ所とも「心」といふ文字にして、崩し方頗る讀みにくけれど、此頃の假名交り本の字體に往々ある所の書體なれば、原本の風體を失はざらんが爲に字形も其儘に存せり。兎に角本書の原本は石塚豐芥子の舊藏を故河竹默阿彌の愛玩せしものにして、古山師重筆作中の傑作たるのみならず、古歌舞伎の研究上にも淨瑠璃の研究上にも、頗る有益なる資料なりと信す。
(原本河竹繁俊氏藏)

元祿 歌舞伎小唄番附盡

貼込帖 一 冊

本書は元祿年間の上歌舞伎の番附なり。すなはち岩井座、荒木座、嵐座、竹島座、松本座、市川香織座、四條北側座等の番附にして、都合十九葉、おさは半三郎身投心中た、き、娘髮結ちんく、節、荒木座の古今節、音羽座のおはら節、都萬太夫座の上の太子道行、評判記の斷片を蒐集して、畫帖仕立に裝幀したる折本なり。原本の奥には「大坂心齋橋通南本町布屋治助所持」の署名あり。とかくに史料少き上方歌舞伎に關するものなれば、最も珍とすべきものといふべし。

按ふに本書は、原本最初の所藏者が其保存に便ならしめん爲、畫帖仕立にしたるものなるべし。而して所藏者「布屋治助」は狂言作者濱松歌國ならん歟。水谷不倒氏の『濱松歌國小傳』に「通稱布屋氏助、又清兵衛といひ、鳥の内布袋町に住す」とありて、歌國の屋號が布屋と云ひし事は右の小傳によりて明瞭なり。或は氏助、清兵衛と云ひし外に、なほ治助といふ俗稱ありしならん歟。彼れの著

書「南水漫遊」の續編に古歌舞伎の外題を列擧したるを見るに、「寶寺開帳」岩井座、「龍女つやおし
ろひ」同座、「南都十三鐘」同座、「船岡山御幸の車」同座、「御評判平野ぼんさま」同座、「鎌倉正月買
嵐座」、「おはせ心中」同座、「名残の盃」同座、「信田妻後日」同座、「女郎二河白道」同座、「丹後成相觀
音」竹島座、「大名寶の綱引」同座、「よめ鏡」松本座、「大和ちごの文殊」荒木座、「當麻中將姫二代記」
同座等あり。それら名題が皆此集のものと一致し居る處を見れば、彼れ此れ相對照して「南水漫遊」
に擧げたるは彼れの所有せりし此集に據りて採録したるものと推せしむるに足ればなり。
更にこれらの番附に就て、伊原青々園氏の考査に據り其興行年月を擧ぐれば、左の如し。但し文
中「年度」とあるは前年十一月の顔見世興行より、其年十月興行までを意味するものなり。

- 一、船岡山御幸の車 岩井座 元祿十二年度。
- 二、當麻中將姫二代記 荒木座 元祿十二年二の替り。
- 三、蟬丸 岩井座 元祿十一年度。
- 四、女郎二河白道 嵐座 元祿十三年度。
- 五、無題 岩井座 元祿十一年度。
- 六、南都十三鐘 岩井座 元祿十三年二の替り。
- 七、稚兒の文殊 荒木座 元祿十一年？。
- 八、無題 右稚兒の文殊の續きにはあらで別の興行なるべし。座元興行年月未詳。

九、無題

但し第三段の右に片岡仁左衛門の扮せるは酒香童子なるべし。此役は元祿十一年に
大阪岩井半四郎座にて大當りを取りしものなり。其時にや。

- 十、大名寶の綱引 竹島座 元祿十三年度。
- 十一、よめかゞみ 松本座 元祿十五年二の替り。
- 十二、龍女艶白粉 岩井座 元祿十二年度。
- 十三、丹後國成相觀音 竹島座 元祿十三年二の替り。
- 十四、信田妻後日 嵐座 元祿十二年度。
- 十五、名残の盃 嵐座 元祿十四年度。

原本張紙には特に三右衛門の紀念に出版したるやうにあるは如何にや、やはり普通の
の興行と思はる。

- 十六、鎌倉正月買 嵐座 元祿十三年初狂言。
- 十七、寶寺開帳 岩井座 元祿十三年？二月。
- 廿四、武勇鑑和合弓始 四條北側座 享保六年正月。

(十八より廿三まで未詳。)

右の表に漏れたる番附に「但馬屋おなつ卅三年忘」あり。市川香織、浪江小勘相座元にして、興行
年月は元祿五年の正月ならん歟。お夏清十郎の一件は萬治元年と寛文二年との兩説あれども、寶永

六年板近松巢林子の『五十年忌歌念佛』に據りて、假に前説に従ふ時は卅三年忌は元祿五年に當れり。元祿十一年板岩井半四郎最期物語に據れば、岩井半四郎が座元となりしは元祿三年にして、其九年に都萬太夫座に於て『傾城玉手箱』の狂言に名聲を博し、翌年大阪の大和屋甚兵衛座へ出で、實方を以て三百兩の給金を取しは半四郎を嚆矢とす。然るに翌十一年卯月歿し子の龜松二代目を繼ぎたり。又『船岡山』の狂言に出演の『金屋金五郎』は額風呂の小三と心中を立て浮名を流し、ことは人のよく知る所にして、其死は此狂言より二年の後なり。又『竹島幸十郎』といふは二世幸左衛門の實子にして、元祿十三年より座元となりたり。『寶の綱引』に出演の『小勘太郎次』は花車方の名優にして、元祿十六年江戸へ下りし、再び上京せざりし由。『嫁鏡』に出演の『秋野澤之丞』は元祿女形の先輩なり、當時坂田藤十郎の『夕霧』中村七三郎の『淺間嶽』秋野澤之丞の『嫁鏡』は歌舞伎三大部と稱せられ頗る著名の狂言なりと云へり。(以上の叙述に就ては水谷不倒、伊原青々園兩氏の考證に負ふ所多し。)

猶内容を見るに、後の芝居に大道具大仕懸の發達を促したる水がらくりの既に歌舞伎に行渡り居りたることは、この『女郎二河白道』と『龍女艶白粉』の二つの番附に依りても知るべし。當時竹田出雲のからくり座と伊藤出羽のからくり座とが、相對峙して水を使ひ人氣を引き居れりしことは、第一期の『稀書解説』の『文七一周忌』の條に云へる如し。又芝居番附以外のものにしては正本屋傳七板『おき身投心中』の『た、き』一枚、最も珍とすべし。『た、き』に就ては、『廿二番職人歌合』に「宿ごと

に春まるらんと契りしは花のためなる胸た、きかな」の歌ありて、頭に頭巾やうの物をかぶり、裸にて腰に餌ぶごを附けたる圖あり。『人倫訓蒙圖彙』には圖はあれど解文なく、與二郎の條に、「一名た、きと云ひ、口早なるを言ひつ、物を貰ひ歩く」と記せり。また『俳諧染紋』には「た、きくたびれかへる門前、口々に乞へど勸進いれずして」とあり。後の「くどき」などもそれより出でたる由なり。されど「た、き」を芝居にて如何に取扱ひたるか、此身投心中の狂言にも心中の出端などを用ひたるにやと云へれど不明なり。かゝるもの、板式として名題の上に座元の紋所を附くるが例なれども、この「一つ巴」は何人の紋所か明ならず、随つて座元も挿圖の俳優も未詳なり。伊原氏は若衆方鈴木辰三郎の紋所が「三ツ巴」なれば其略かとも言はれたり。『世々接木』に「丸に一ツ巴」の紋所の俳優に中村治郎三あれど、時代の懸離れたる元文頃なれば詮方なし、外に「一ツ巴」の紋所未だ見當らず。『娘髪結』のちん／＼節は岩井半四郎、片岡仁左衛門相座元の時舞臺にて謠ひしものか、俳優の紋所「萬字」は村山平右衛門か又は多門庄左衛門、「丸に三星」は水木辰之助か或は其一門なるべけれど、中央の俳優は不明なり。ちん／＼節は時の流行唄なるべく、其おほまかなる歌章の調を味ふべし。古今新左衛門の唱へ出せし『古今節』は、新左衛門と藤井八十郎の懸合とあり、初めの唱歌には肩に「上るり中」後の分には單に「中」とあるが、この唱歌は音頭やうの謠ひものにて傳承さるゝが多きやうなり。然るに上るりとあるを見れば、或は淨瑠璃が、りのものなりしにや。又は淨瑠璃の間へ挟みて謠ひしか、それとも狂言を演じつ、謠ひしか今は明瞭なる能はず。こゝに載せたる唱歌を「松

の落葉』に對照すれば、其一は「隅田川」其二は「伊呂波」と題するものなり。『おはら節』は當時の流行歌なりしことは勿論なれど、歌曲の傳承すら詳かならず。「丸に梅鉢」は音羽次郎三郎の紋所にして、音羽芝居とあるは其座元なれば音羽座と云へるに同じ。都萬太夫座の『上の太子道行』といふは、河内國の名所に上の太子といふ所あれば、其事蹟を仕組みしものなるべし。最後の『替新大評判』の斷片には市川團十郎の評あり。團十郎の上京は元祿七年なるのみならず、他の俳優も元祿期の名優なれば、其頃のものとたること疑ひを容れず。然るに此斷片に『川原新板』とあるより、「カハラ板」の文字は「瓦板」にあらずして「川原板」ならん。即ち京の四條川原の諸興行物を板行せしが濫觴にして、四條川原物の板行の意味ならんかとの説あれども、此斷片は所謂瓦板と板式を異にせり。瓦板は風に土板木と稱し此頃既に世に行はれつゝありき。故に此斷片のみを以て川原板の證とせんは物足らぬ心地す。土板木と稱するものは粗刻の木板にて後の瓦板の前身なり。

『身なけ心中』以下の一枚摺は、小唄番附と稱すべきものなるや否や疑ひなきにあらざれども、今は原本の表紙に記したる題名を其ま、踏襲する事となしぬ。
(原本岩崎文庫藏)

明月餘情

中本 三 冊

本書は安永六年刊行、新吉原の俄を描きたる中本形繪本三巻にして、新吉原大門口萬屋重三郎出版なり。初編には巻首に明誠堂平澤喜三二の序文と巻末に無名の跋文あれども、二編、三編には序跋

なく、三編の末尾に一線を劃し「安永六年丁酉八月吉日、書林、新吉原大門口萬屋重三郎板」とあり。猶その表紙裏に、蜀山人太田南畝の自筆にて「文化七年庚午三月十八日淺草葦市の日淺草黒船町の本屋にて求得了、蜀山人」と記し、又別行に「文政元年戊寅六月伊澤氏贈此本竝二編三編併藏千家の文あれば、本書は彼が舊藏にかゝるものなり。

新吉原に於ける「俄」は、享保十九年より起りし如し。廓内には早くより五ヶ所に稻荷を勧請せり、即ち新町、後の京町二丁目には九郎助を、江戸町には榎木を、伏見町には明石を、京町一丁目には愛敬を、五十間には吉徳を祀り來りしが、享保十九年に至りて、九郎助稻荷が正一位の官階を受領せしを機會に、盛大なる祭典を行ひ、廓内の男女競うて練物を催し、これを「俄」と稱せし由は「細見全盛鏡」、「嬉遊笑覽」等の諸書に散見す。されども其時は單に祭禮の餘興に過ぎざりしなり。之を新吉原の形容事の一として興行せしは明和四年の秋なりき。それより二三年は年中行事の如くになりて繼續せり。然るに安永元年に目黒行人坂よりの有名なる出火によりて廓の燒失せし後、此事全く中絶せしを、安永四年に及びて再興せり。此事は本書の序文に「去々歳不圖再興ありて猶去年に繼り其賑ひ年を追て盛に趣向倍興有云々」とあるにて明かなり。猶文化中頃の寫本かと思はる、梧桐亭久儔の「吉原春秋二度の景物」を見るに、「安永五年仲秋より季秋まで又爾和加の事を催しありける、此度は一統に花やかに粧ひ成れり、さりながら江戸町二丁目は不出」と記して其盛賑を極めたる光景を舒し、「寄るもさわるも俄の評判、是を見ぬ人は人間の數に入らぬと足を空なる宇頂天云

々」とあるによりても、當時の評判を推測するに難からず。尙、實際の草子一冊ありとて、安永五年申初秋の年號ある序文を挙げたれども、惜むらくは其書名を記さず。但し註書に「是れ俄番附のはじめ也」とあれば、『明月餘情』よりも一年以前に仁和嘉番附の類本ありしを證するに足る。翌六年には、前年は躊躇せりし江戸町二丁目にて、初編に見えたる大袈裟なる催し、即ち「七福神當世遊」を舉行せし事『吉原春秋』に記しあれば、これより年々行ひたるならん。この「俄」の再興に就ては俳人一鷹（妓樓下總屋主人）の肝煎に依りて安永四年に催し、好評なりしを以て其翌年頃より確實に復興したるなるべし。俳人一鷹がこの再興に與つて力ありし事は『吉原春秋』に、彼れの歿するや、山谷の安盛寺の墓地に杏葉牡丹の紋附きたる幕を四方へ張り、追善をなし、ことを記し、且つ一鷹の歿後はゑびや松歌といふ者、俄の世話をなしたれば、人彼れを呼んで「仁和嘉屋松歌」と云へりし由附記せり。されば本書は、その再興より三年目の俄を描きたるものにして、現存せる俄番附の最も古きものと見做すべき珍本なり。

當時の俄に就ては跋文中に「首は茶番尾は祭禮足手は躍の如く、啼く聲芝居に似たる云々」と其本體を解剖し居れり、以て『明月餘情』の所謂茶番と後の俄との異同を見るべし。此種の催しは次第に祭禮の練物にも影響を及ぼしたる所多かるべし。本書中の圖を見るに、初編の五節句揃、長唄後面、滑稽太神樂、七福神當世遊の寶船、管絃唐人揃、二編の獅子、助六、竹馬の所作、座頭踊、おつゝら馬、龍神囃子、祇園御典、三編の大津繪揃、官女揃、雀踊、角兵衛獅子等は皆大掛りの趣向なり。

この外に『吉原春秋』には、歌仙、大江山、角力、琴責、栢の山、五人男、逆櫓、道成寺、會我、胡蝶、萬度、禿萬歳、橋辨慶、三番叟などの題目を挙げあれば、此時の俄が如何に盛大なりしかは追想するに難からず。

畫の筆者は署名なし。戀川春町とも喜多川歌麿とも云ふ。但し春町としては筆力に於てや、首肯し難きものあり、さりとて歌麿としても疑はしき點なきにあらず。或は彼れが豊章と號せし時代の筆すさびにもあらんか。北尾政演の畫風にも酷似せる所なきにしもあらず、しかし安永六年は彼れが尙十八歳なりし頃なれば、かばかり圓熟せる筆を有したりきとも思はれず。猶勝川春章にあらずやといふ説もあれど、壺屋としては筆力に慊らざる所あり。諸説を列舉して博雅の垂教を待つ。

本書三編とも紙數九張なり。然れども初編は「八ノ九」、三編は「五ノ六」とし、最終の張附を「十」としたれども、二編のみは九張を以て終れり。又初編にも三編にも板元を記せるに二編にはなし、或は落張にあらずやとの説なきにあねども、畫面よりしても落張と見るべき點なく、初編三編と紙數同一なれば疑ふ餘地なし。又原本は表紙本文とも完全なれども、題簽は亡はれ居るを以て、跋文中の文字に依り之を補ひたり。

（原本初編河竹繁俊氏藏、二編、三編久原文庫藏）

吉原はやり小唄惣まくり

中本 一冊

本書は其題名の示せる如く、吉原遊廓に流行せし小唄集にして、末尾に「右此歌は直之以正木令

板行者也、江戸さかい丁中島屋伊右衛門板」とあり。序跋ともになく、開板年月をも記載せざれば、その年代については、いつ頃とも定め難く、柳亭種彦以來研究家の間に數種の異説あり。一説によれば、初板は萬治三年に、再板は寛文二年に發行し、三板は寛政年間に『吉原繁榮草紙』と改題して出版し、四板は文政二年に、もとの『吉原流行小唄惣まくり』に復して刊行せり。此文政本の序文にも、萬治三年を初板なる由いへれども、是等は信を置き難し。有力なる反證の出でざる限りは、柳亭種彦の「延寶の末、天和の頃の出版なるべし」といへる考證に據りて、延寶天和頃の開板なるべしとの推斷を正しとせざるべからず。

種彦の『吉原書籍目録』中の本書に關する條を見るに、梓影の年號ある本は未だ見ずとありて、「或人此冊子を再彫し吉原繁榮さうしと外題を直し、其序に寛文二年と年號ありしが破れたりと書きたるは信じがたし、予古き印本を見るに年號なし」と述べ來りて、序といふべき處に、道哲が未だ島田重三郎たりし頃、二代目高尾との關係の昔語を記したるまでにて、近きことをいふにあらず、土佐淨瑠璃『三世二河白道』の行はれし後のものなるべし、この寛文板なるものに吉原通ひの馬の駄賃附あり、然るに延寶六年の印本『吉原戀の道引』にも駄賃附あり、併し引合せ看るに『道引』よりは『惣まくり』に記したる方直段高し、斯かる賃錢などは次第に昇りこそすれ、降るものならねば正に是れ延寶六年以後なる證なり、故に「延寶の末天和の頃の印本なるべし」と斷案を下し、また「伏見町堺町の出來たるは寛文八年なり、柳橋より堀までのちよき舟の料、寛政の初めまで百文、寛政末より

百廿四文、享和の頃より百五十文、今に其價なれど船頭に酒代を取らせねば徒歩より遅し、かの駄賃も其例にて次第に高くなりしなるべし。寛文二年と序にあり、天和貞享の頃一葉彫足したりと覺ゆるそれに、島田重三郎の事、駄賃附等あり、また吉原繁榮草紙としたる再刻本あるも人の知る所なり。さればかの駄賃附ある一葉の附きたるものは元板ならずといへり。

以上の種彦が所説によりて、駄賃附一葉を延寶六年以後のものとするれば、「吉原はやり小唄惣まくり」の開板は其以前なりとも云ひ得らる、が、版式、畫風等より見ても寛文説は甚だ物足らぬ心地す。蓋し初刻萬治、再刻寛文説の如きは、文政本の跋文に琢玉齋の唱へ出したる誤傳にあらざる歟。又寛政に三刻せしものを『壽繁榮草紙』と云ひ、「壽」の字を「吉原」と訓じたりとも云へれど、世に寛政板と稱するものは『吉原はやり小唄惣まくり』の外題に復し居れり。されば此書が斯く幾度か翻刻されしものとすれば、遊惰に流れつ、ありし時世に適應して世人に持囃されしものならん。

本書の内容は、言ふまでもなく、其頃吉原に流行せし小唄を集めたるものなるが、元來かゝる粗雑なるものに、序跋のなきは類例多し。本書もまた序なきが本來の面目なるやも知るべからず。挿畫も『吉原戀の道引』の圖様に摸したるらしく、世に菱川師宣の若描きと稱する畫風に酷似して延寶頃のものの、如し。第二圖、日本堤下に「新茶屋」と記名したる邊は、田町の編笠茶屋以西髪洗橋あたりを指したるらしく、當時此邊を新茶屋といひたるならん歟。第三圖の道中、茶屋暖簾に丸に立澤瀉の紋あるは、江戸町の大上總屋なるべし。第四圖、格子、局見世も面白く、素見ぞめきの往來す

る中に「本賣喜之助」とナツボウを入れ、手の上に本を載せたる行商を畫けるは、細見または本書の如きものを賣りしことあるにや。又古き好色本などに遊女を様附として貴び、客を買人ども、ども附に扱ひたるは、之を筆拍子とは見るべからず。常人とは其生活状態を異にせる賣色社會に在りては、遊女其者を本尊と崇むる遊廓詞の寫實と見るべし。本書第一圖に伊達を競ふ風流男、第五圖の豪遊するダッラ大盡のナツボウに「買人ども」の侮蔑語を用ひ、遊女の方には、第四圖の「はやかはさま」第五圖の「たかをさま」と敬語を附しあるを見ても、此頃の別世界の日常語となり居りしことを、本書に依りて推知すべし。

(原本三田村壽魚氏藏)

繪本江戸土産

牛紙本 三冊
上中下

本書は畫工西村重長晩年の筆に係り、「寶曆三年六月板元奥村喜兵衛」とあるもの其初板にして、「安永八年己亥正月吉日平安書林寺町三條上ル町菊屋安兵衛求板」とあるものは其後摺なり。共に上中下の三冊より成れり。之を一冊に合本して發行したるは文政頃なるが如し。

畫工西村重長は、『武江年表』には、享保年間に行はれし畫工なりとして、筆頭の奥村政信のすぐ次位に擧げたるは、當時儕輩を凌ぐ名聲ありしが故ならん歟。また『扶桑畫人傳』及び『浮世繪類考別本』に據れば、重長は俗稱孫三郎、仙花堂と號し、通油町に住す、其師は詳かならざれども鳥居風を描く、一枚畫多し、初代鳥居清信の門より出づと云ふ説あり。且つ彼れの筆に成れるもの、中

『今様職人盡百人一首』と『繪本江戸土産』とは最もよく世に知られ、寶曆六年六月二十七日六十餘歳にて歿しぬとあり。されば本書を描きしは歿年より恰も三年前に當りて、最も圓熟せる六十歳の頃の筆なり。既に老境に入つて尙能く斯かる細密の畫を描き、殊に開卷二張半に亙る「兩國橋の納涼」の如き、水陸の全景を仔細に遺憾なく寫し得たる努力を想ふべし。各階級の風俗、其頃流行せし箱漬鮎、川口屋の鈴、露店、うろく、船等の賣物、乃至當時東兩國に軒を並べて名高かりし「あわ雪」、即ち手輕専門の豆腐料理までも網羅せる同じ筆を以て、淺草、上野の如き最も著名なる名所二十六ヶ所を、穩健にして雅趣ある自在の筆にて描けり。今これを微細に味へば、寶曆時代の江戸を窺ひ得て其變遷の跡を観る好資料たるべし。

本書の複製に際して、寶曆板の完本を得ること能はざりしは遺憾なれども、幸ひに其上巻だけは、會員川島貞造氏所藏のものあり、即ち江戸書肆奥村喜兵衛方の出版書目の奥附ある寶曆板(零本)に據ることを得たり。序文は「武藏野の月も家より家に入る云々」と書出し、其末に「續江戸土産全部三冊追付出来」とあり。安永の後摺の如きは序文も之と異なり、見返しの隅田川舟遊の圖も省かれたり。後摺の合本のうち、稀には初板の序文及び見返しを其儘に存して、更に再板の序文の「紫の名に負ふ東都の壯觀云々」を跋文の如くにして添へたるもあり。されども後摺のものは、概して初板とは序文を異にせり。初板序末に「追付出来」の豫告あるを見れば、後編の開板をも計畫したりしが、筆者重長の歿したるを以てこれを遂行する能はず、後摺のものは「追付」の二字を削り去り、後重長

の高弟たりし鈴木春信が、師匠の遺志を継ぎ『續江戸土産』を書き開板するに至り、後摺の序末に『續江戸土産鈴木春信畫全部三冊出来』と記するに至りしならん。按ふに前者は、春信畫の續編出来の後に「追付」の二字を削りたるなるべく、後者は、序文と其書體を異にせる點より見るも新たに入木せしものならん。

複製本は松廼舎文庫本を底本としたるなるが、之を川島氏の寶曆板本、帝國圖書館、東京帝國大學附屬圖書館、林若樹氏、小林文七氏等の藏本と對照したるに、本體の圖様に於ては相違なかりき。猶安永板の序文をも參考の爲め添へおきたり。

(原本松廼舎文庫藏)

繪本續江戸土産

牛紙本 三冊
上中下

本書は西村重長の『繪本江戸土産』の遺漏を補ひたるものにして、畫工鈴木春信の筆に係り、日本橋を振出しに廿八圖を收めたり。この正、續二編の『江戸土産』は寶曆明和年間に於ける江戸時代の風俗を窺ひ、其變遷を知るの好資料なり。開板の年月は記せざれども、按ふに、正編開板後十餘年を経たる明和二年以後なるべし。板元を京都の書肆菊屋安兵衛と記せるもの恐らくは初板ならん歟。本書の畫家鈴木春信は、正編の畫家西村重長の高弟なること『浮世繪類考附錄』にも云へり。『武江年表』及び『浮世繪類考』に據れば、寛延、寶曆の頃には石川豊信、鳥居清倍等をも凌ぐといふ評判ありて其名顯著なりき。重長が正編を書きし寶曆三年には春信既に五十歳にして、斯界に覇を稱

し、世人に重視され、明和の初年には東錦繪を書きはじめ、同六年には彼の有名なる美人繪、湯島の巫女お浪、お美津、谷中の茶店女笠森お仙、淺草觀音楊枝店のお藤の姿等を畫き、滿都の喝采を博せしこと人のよく知る所なり。この『續江戸土産』を書きしは、歸耳順の頃なれば、周到なる着想と圓熟せる筆致とに依りて、時世粧を自在に活躍せしめたり。既に正編の解説にも言ひたるが、重長は其序文の末に續編の刊行を豫告しつゝ、歿したれば、彼れとは師弟の關係ありて當代の人氣畫家たりし春信が、書肆の懇請に應じて師の遺志を襲ぎ、寶曆、明和の江戸風俗畫を完璧たらしめしは自然の順序なり。但しこれを書きしは重長の歿後十餘年、即ち明和二年以後なるべし。そは中冊に「本所鹽濱」の圖あるを以て證するに足る。蓋し本所の六萬坪、今いふ平井新田に鹽濱を開始せしは、明和二年の七月なれば、其以前に之を畫くべき理由あらざればなり。さて之を明和二年後の製作とすれば、彼れが續編を書きしは、師重長と同じく六十餘歳の老境に入りて後ならん。此密畫をさる老後に畫きしとすれば、其精力の早衰せざりしを察するに足る。雅致に於てこそ師重長に一步を譲れ、技巧に於ては遙に其師を凌駕せりともいはん。重長も正編を畫くと間もなく歿せしが、春信もまた本書を畫くと間もなく、明和七年六月十五日六十五歳にて歿しき。

今内容を見るに、初めの日本橋の圖の如きは、二張に互りて當時の江戸を躍如たらしめ、橋側駒寄外なる捨石にまで留意せり。これらより推しても全編が寫生圖たること明かなり。風俗上より見るも、婦人が往來にかぶり笠を戴くならば此頃より日傘に推移せんとせしことも、深川八幡の

圖中に紺の日傘を翳したる女あるによりて知るべし。されど稍や年長の婦人は猶前帯のみなり。尤も老若ともに女の帯を後ろにて結ぶやうになりしは化政度のことなり。また屋形船より變化せし屋根船も、寶曆、明和の頃は次第に盛んになりたり。そは仙臺川岸、深川二軒茶屋等の圖を見ても知るべし。仙臺川岸は花火の名所として江戸人が仙臺花火の美觀を賞したる船遊びの名所なり。二軒茶屋も八幡鐘のきぬぐに游子の腸を刺りたる面影を偲ぶべし。明和の頃の流行物たりし釣鐘その他の實物を飾り曳き廻りて勸化を募りしさまも見えたり。一々圖様を舉げて評せんは冗長に流るべきを以て省きぬ。

正編には各所に舒景文を添へたるが、本書は單に證明のみを添へたり。其説明中に往々缺字と見るべき箇所あり、殊に上册三張裏日本橋の圖の書入の初めと、中册二張表三十三間堂説明の末文とは削り去られたること明かなり。依りて東京帝國大學附屬圖書館所藏の菊屋板本、その他二三本と對照したるに何れも本書と異なりたる點なし。按ふに當時忌諱に觸るゝところの文字ありて削り去りたるにや。

(原本松濤舎文庫藏)

追分繪

半紙本 一册

本書は其開板年月の奥書なけれども、半時庵淡々の序文に「寶永六己丑のとし」とあれば、寶永末期の梓刻なるべし。編者は、中尾我黒の跋文に「作者の規模珍舎が面目」とあれば、珍舎たること明

かなり。畫は高城等碩の筆に成り、之に當時知名の俳人の句讀を自筆によりて添へたり。

此『俳諧追分繪』の事に就いては、第一期の『大津土産』刊行の際に、大津土産よりも刊行年月は一段古く、又圖様も多き由を一言しおきたるが、今本書を精査するに、彼れには三十六圖ありて、此れは四十二圖あり。但し其畫模様は俗に大津繪と稱するものとは様式を異にせり。只題材ばかりをそれに採りて、圖柄は當時の風俗繪らしく改描せり。開板は安永九年板の『大津土産』に先だつこと七十餘年なり。追分繪としては最も纏まりたる最古のものなるべし。

『大津土産』の解説中にも述べおける如く、此種の畫の發生は寛永、正保の交にして、京都と伏見との追分に於て鬻きたりしかば追分繪と呼び慣はし、寶永頃までも然く稱したりしならん歟。かくて寶永より八十餘年を経て寛永に至るや、追分繪の本領たりし繪佛は、いつしか影を潛め、唯其粗朴稚拙なる描法のみを特色とすること、なり、漸く衰廢の兆を現せり。本書の如きも其描法こそは異なれ、かゝる時世の推移に因りてか、僅かに十三佛中の一を存し、阿彌陀や三尊佛等はなし、主として諷刺畫のみとなれり。しかし諷刺畫中には、犬と座頭の如き、や、様式の秀でたるものあり。此種の畫を『大津土産』のそれと對照せば、追分繪の變遷を考察する上に多少の葉を得べし。按ふに、本書が古き追分繪と其様式を異にしたるは、當時の顧客即ち鑑賞家間に舊描法を卑俗視する者多くなりて、只題材のみを採用するやうになりしにあらざる歟。然れども其後七十餘年を経たる『大津土産』刊行頃には、所謂浮世繪の形式漸く整頓し、卑俗ながら世間に著名なるものとなれるに隨ひ、

其簡樸なるを珍として愛玩せるもの多くなり、其復活の機運を見るに至りしもの歟。(大津土産解説参照)

本書卷末に「雪舟末孫等碩圖」といふ署名あり。此等碩は『古畫備考』、『本朝畫工便覽』、『大日本名家全書』等に據れば、雪舟の門下にして、嘗て師に隨從して明に適きし高城等觀秋月の子なり。牧雲とも號せり。父秋月が薩藩を致仕して僧となりし後も、等碩は依然として薩摩侯に仕へたり。

卷頭に序文を物せる半時庵淡々は關西俳壇の大立物なり。寶曆十一年八十八歳にて歿したる大阪の人物にして、姓は松木、點印に青肉を用ひ始めたる人なり。『俳諧年表』その他にも其角の門人とありて自らも其角門なりと稱し居れり。但し『翁草』卷の十には、京都の貞徳派の宗匠等に反抗し、それによりて名を知られ、數多の宗匠連をして顔色なからしめたる事を叙し、且つ「元來其角の弟子と云ふは虚事故、何れの傳系もなきを患ひて云々」と書し、兒島大奎を手懐けし事などを詳説せり。本書の序文は淡々が三十六歳の時の筆なり。其次の序文の筆者珍舎は本書の編者なるが、年表には其名見當らず。『翁草』卷の百五「享保年間洛俳諧の噂」の條に、當時有力なる點者三十一人を擧げたが、其中に懷重といふあり。珍松舎松田と注せり。又『俳人ばなし』に松田珍舎といふ名あり。或は是れ其人ならん歟。本書の跋文の筆者我黒は重頼の門下にして姓は中尾氏なり。青白翁、李洞軒と云ひ京都の人寶永七年七十一にて歿せり。畫譜には言水、尙白、才鷹、路通、團水等もあり。『翁草』に擧げたる噺花堂晩山、應々翁方山、而笑堂鞭石の、三老及び迎光庵雲鼓、石壽堂暮四、化留齋

仙鶴、半時庵淡々等の名士を集め、又其角門なる佐竹藩の家老其筆こと梅津半右衛門もあり、末に珍舎、我黒、也長、三吟の半歌仙、および淡々の發句にて珍舎、我黒、也長、仙鶴等の吟詠せる歌仙を添へたり。

本書の原文は序文の三張と本文十四、十五の二張と初めの半歌仙一張とは缺張しをれるを以て、故水落露石氏の所藏本に依りて補足したり。又題簽は文字剝落し居たるを以て、序文の文字をとりて代用したり。
(原本小山曉杜氏藏)

新花摘

大本 一册

常に「發句集は出さずもあれ」と叫びつ、ありし與謝蕪村の自筆遺稿を刻したるもの即ち本書にして、況く世に知られたるものにはあれど、其刊行年月も不明、其開板者も不明なり。奥書に「翁物故の後、其冊子を解いて横卷となし、聊か文章の意を盡いて、先師眞蹟の證とする。天明甲辰夏佛出の日、月溪誌」とあり。こゝに甲辰といへるは天明四年に當れり。すなはち蕪村が遠逝の翌年なり。此文意に據れば、最初は假綴の冊子なりしを、改めて卷物とし、後また吳春の畫をも加へて梓刻し、本書の體裁の如くして刊行せしもの、如し。蕪村の著には、此「新花摘」の外に、「七部集」蕪翁句集等數種あり。されど本書中に、其角の『五元集』を論じたる條下に「句集出で、後、すべて日來の聲譽を減するもの也」といひて、俳人の爲に句集の出版を歎惜せし程なれば、生前自己の句集を

出だすを許さざりき。随つて豪放にして酒脱、飄逸にして奇警なる彼れが金玉の名句も、特に書留めたりしは稀なりきといへり。蕪村が歿せし翌年、天明四年冬十二月の跋附きたる『蕪翁句集』二巻の如きも、門人几董等の書留め置きたるを編纂せしに外ならざるを見て、其間の消息を知るべし。然るに本書は蕪村門の月溪の奥書中に「先師夜半翁自書也、翁ひと、せ、一夏中のほ句かいつくるとて、かりそめの冊子をつり、續花つみと題して日毎に十章ばかりを記す、云々」とあるによりても、蕪村が當時日課のごとくに詠出せりし句、または思ひ出し、舊詠等を録しつゝ、ありしこと明らかし。

其内容を通覽するに、日附は四月八日より起り、六月十六日を以て終りとせり。されども日課の句は「灌佛やもとより腹はかりの宿」を初筆に廿三日まで繼續し、こゝに至つて「此日より所勞の爲によるづ怠り勝なり發句など案じるべくもあらねば幾日も徒らに過し侍る」と記し、病翌廿四日の下に八句ありて、廿五日の條下より五元集を論じ、又旅行中の奇話怪談或は昔語などをつぎ／＼に書き流しあり。按ふに頭書の日附は、日々記入したるものにあらずして豫め書き列ね置き、日々詠句を其條下に書きこまん初志なりしも、病の爲に蹉跌し、其餘白へ心に浮ぶ事どもを筆のまに／＼書きしと覺ゆ。随て其期間も短く、又句數も多からざれど、其角が『花摘』に擬して『續花摘』と題してまで書したる本書は、彼れが自筆の句集に兼ねる文集なれば、當時より好事家に珍重せられ、殊に俳人間に重んぜられたり。平素の主張に反して書き捨てにせざりしは、何等か特に思ふ所ありて

なるべし。されば彼れが眞面目の閃影は主として本書に據りて窺ふを得ん歟。又本書標題を月溪の奥書には『續花摘』とあれども、『新花摘』となしたるは、恐らく刊行當時よりの事ならん。蕪村手記の稿本には何れが採川されしか、何となく巻首の標題の「新」の字は下の「花津美」の三字と一致を缺く心地せらる。敢て博雅の示教を仰ぎたし。

蕪村、名は寅、又長庚、字は春星といへり。宰馬、三果、東成、四明、碧雲洞、紫狐庵、落日庵等の別號あり。また夜半亭とは、四方を遊歴したりし後、京都に留まりて一乗寺村に住せし頃より、其師早野巴人の號を襲きて、別號とせり。出生は攝津の人、本姓は谷口氏、後年丹後與謝湖の勝景を愛するの餘り、與謝と稱せしが、時に支那風に「與」を省きて「謝」の一字を姓とせしことも多し。性質磊落不羈、尋常一様の畫家、俳人にあらざりしことは既に世に定評あり。天明三年十二月二十五日歿す。享年六十八、洛外一乗寺村金福寺、芭蕉庵の傍に葬らる。又奥書の月溪は四條風の畫家にして吳春の別號なり。本姓は松村、俗稱を嘉右衛門と云ひたり。京師の人、曾て攝州吳服里に居りしを以て吳を姓とす。畫を蕪村、應舉に學び、俳諧は蕪村に師事し、京四條通りに住せしかば其畫風を四條風と稱され、文化八年七十歳にて歿す。蕪村が其角に私淑し居たることはいふまでもなく其筆つきまでを其角に學びたるが、蕪村門下の月溪はまた其書體までを蕪村に摸したるはをかき現象ならずや。

本會所藏の原本は其顯簽を逸したり。複製に際し、東京帝國大學國文研究室の藏本（酒竹文庫舊

藏)に依りて之を補ひぬ。同書には「新花摘」の下に「全」、其傍に「夜半亭自筆」とありたれども、題名の外は後人の書入れたるものなれば之を削りたり。然るに小山曉杜氏の藏本には、顯簽に「全」の字をも掲出しありといふ。蓋し刊行年月に先後あるが故ならん。

(原本本會藏)

手拭合たぐひあはせ

中本 一册

本書は天明四年六月出版の色摺本にして、山東京傳の妹黒鳶女が催主となりて舉行せし手拭合に、粹士通客が互に輕妙なる趣向を闘したる其儘を、北尾政演(京傳)自身が寫し取りて、同好の士に頒ちし珍本なり。

斯くの如き洒落を主とせし會合は、狂歌の流行に伴ひし餘興なりき。一時は享保年間に死せし鯛屋貞柳の狂歌が時好に投じて、殆ど全國を風靡したりしが、其風調漸く上方好みに流るゝに及びて、清爽洒脱を喜ぶ江戸の市人の好みに適はず。安永の頃よりは内山椿軒門下の太田蜀山(四方赤良)、唐衣橘洲、朱樂管江らの才人輩出し、所謂天明調を詠じ出し、狂歌の風格こゝに一變せり。是等の影響にて、安永三年には、牛込原町經王寺に於て朱樂管江催主にて始めて「寶合」といふと行はれ、同人間に喝采を博しぬ。それより其種の催し處々に興り、天明三年には第二回の「寶合」あり。此「手拭合」は其系統に屬するものにて、翌四年六月、不忍池畔の寺院にて京傳妹黒鳶女の名にて催されしなり。此黒鳶女は「青本年表」に據れば俗稱を米女と云ひ、明和八年に生れ、天明六年に早世す。

されば當時はやつと十四歳の少女にして、斯かる會の主催者たるにふさはしからざるは明かなれば、實際は、京傳を主として此書の校合に署名せる萬象亭、戀川好町、鳴瀧音人、式柳郊らの同好の道樂會なりしならん。又この「手拭合」の出版に就いては、某侯の留守居役が資を投じたりといふ説もあり。猶、此會ありし翌春に同好の一人なる千差萬別の作「無駄酸辛甘」といふ黄表紙が出でて、此會に關する皮肉なる素破抜あるやに聞きたれども、未だ其書を閱覽せざるを遺憾とす。

本書の體裁は巻頭の序文に「松葉館遊女歌姫書」とあり。天明四年五月版の細見に、松葉屋の歌姫は入山形に一星にて第二位を占め、其前年版の「澁都酒美選」には「歌姫のこのへの筆のごとくなりなが文かきてうたはかくとも松枝の葉色はおなじ」と評せられをれり。又跋文を當時の俳優にて書畫に堪能なりし東籬園路考、即ち三世瀬川菊之丞(仙女)に書かせたるなど、随分物好をしたるものなり。巻中に收むる七十九圖は貴賤を選ばずして趣味を愛好する人々を網羅せり。序文の次の別座として敬意を表したりと見ゆる三名あり。第一の「雪川公」は松平不昧公の令弟にして三助のちか直親と云ひ、爲樂庵、雲間の號あり、雪川は其俳號なり。江戸の通人を以て任じ、岩瀬京山の「蜘蛛の絲卷」にも、大名の通人なりと記せしなり。又第三の「杜綾公」は屠龍に通はしたる匿名にて、酒井抱一なるべく、第二の「香蝶公」は某留守居の匿名なりと云へれど不明なり。全體の趣向を通覽するに、何れも流石に洒々落々たる趣きありて灰汁抜したり。化政以後の類唐時代の氣障なるものとは霄壤の差あり。此頃は狂歌にも、斯かる趣向にも、おのづから一貫したる趣味思想ありて、能く其時代を

表現せり。

本書の複製に關しては、原本の色彩及び裝幀を例の如く其儘に移すことに力めたり。原本題簽を逸したれば、久保川米齋氏の藏本(角川竹冷氏の舊藏)によりて之を補ひたり。(原本林若樹氏藏)

吉利支 丹板 *こんてむつす・むんぢ* 見本六張 大木 一册

本書は慶長十五年日本耶蘇會の出板にして、全部平假名混りの木活字板なり。日本耶蘇會刊行の書籍は二十餘種あれども、國字を以て記したるは七種あるのみ。其七種のうちにて日本に存在するものは僅に、『太平記拔記』六卷と此『こんてむつす・むんぢ』の二書なりといへば、珍本たる事論をまたず。左に林若樹氏の手記に係る解説を掲ぐ。

西曆一六一〇年我慶長十五年日本耶蘇會出板の『こんてむつす・むんぢ』(世を厭ふの意)とは、彼の有名なるトーマス・ア・ケムピスの一四四一年の述作にかゝる *Imitatione Christi* をいふのである。又近年中山昌樹氏に依つて和譯された『基督に倣ひて』と同書である。

本書は堅八寸八分、幅六寸三分五厘の美濃本であつて、内容は一册の中を四卷に分ち、紙数は扉紙一枚、目錄三枚、本文七十五枚、合計七十九枚より成り、澁色の表紙を附してゐる。全部平假名混りの木活字板にして、本文一頁約十七行に組み、新村博士の言はる、歐羅式系統に屬する、細字木活を使用してゐる。

今フアクシミールとして書冊全體の圖一頁、扉紙表裏兩面一枚、目錄一頁、第一卷本文最初の兩面一枚、第二卷々頭の一枚、最後の二頁、以上紙數六葉を印刷に附して、其髣髴を傳へるのである。

本書の原文は羅甸文に書かれ、歐洲に於ける最初の印行は一四七一年と言はれる。日本に於ての印行は一六一〇年に先つこと十四年、一五九六年(慶長元年)に小木の和譯羅馬字綴本が發行されて、今英國牛津のボドレイヤン文庫に收藏される。其書は記載はないが、活字體より天草板と推定される。サトー氏の日本耶蘇會刊行書志に引くところの此書の羅馬綴文、第一章を國字本に對校すると、僅に字句の相違があるのみで、大體に於て同じである。思ふに國字本は慶長元年の天草板から校訂して、國字に直したものであらう。而して羅甸文より翻譯したることは無論である。

日本に於ける吉利支丹板は、一五九〇年(天正十八年)伴天連ヱリニヤーニが、西洋の活字並活字鑄造器械を携へ來り、翌天正十九年に肥前高來郡加津佐の學校に於て、『サントスの御作業』を刊行したのに始り、暫時にして其學校は天草に移り、其處に於て數種の出版をなし、後其學校の破壊せらるゝるに及んで、慶長三年長崎に移り、同處に於て又數種の刊行がある。從來、加津佐板、天草板、長崎板は世に知られて居るが此國字本『こんてむつす・むんぢ』の扉紙 *Miaciofficina Farada Antonii* 卽「都の原田アントニョの印刷所出版」とあるに依て初めて此書によりて京都板

ある事を證せらるるとは新村博士の説である。

此國字本の出版は、バジエーの書目にも推定されて居たが、世に出たのはこれが最初である。サトー氏は其書志に「既に羅馬字綴和譯本の出版されたるを見ると新譯本の必要は無ささうにも思はれる」と、多少其出版にも疑問を有つて居られるが、文獻を外にしても、近年京都並高槻地方より發見された教徒の墓石、六基の年號の慶長五年より同十五年に至るのから考察すると、慶長七年の關ヶ原戰爭より同十九年の大坂陣に至るの間は、耶穌教の禁令も緩びて再流行したことが傍證される。隨て教理を書いた國字本の必要が起つたので、此書が再板されたのであらう、現在に於ては耶穌會出版の書としてこれが最後のものである。

日本耶穌會刊行の書多くは本邦より散逸し、却て歐洲の圖書館や愛書家等に保存されるものが多い。而して其刊行種類は二十數種に及ぶ、其内國字を以て記したるものは落葉集。サル・ワトル・ムンヂ。ギャ・ド・ベガドル・ドチリナ・キリシタン二種。太平記拔書竝に此こんてむつす・むんぢの七種であつて、日本に存在するのは太平記拔書六卷(内野皎亭氏藏)と本書の二部のみである。

此書は越前の某舊家(此家には種々なる傳説あるも今は省略する)に耶穌教の遺物數種と共に傳來したのを大正五年の暮と同七年の春の二回に互つて全部予の手に歸したものである。

大正十年六月下院

林若吉記

(原本林若樹氏藏)

佛說摩訶酒佛妙樂經

折本 一 册

本書は懷中本の經卷に擬して、酒徳を頌したるもの。龜田鵬齋の戲作なり。卷頭に谷文晁の筆にて阿彌陀の像に擬したる酒壺佛に向ひて、酒豪劉伯倫夫妻の拜跪せる圖あり。又卷末には酒井抱一の筆にて酒仙李太白が酒壺に凭りて爵を前にしたる圖あり。渡邊案の跋文中に「癸未夏」とあれば安政六年の刊行なるべく、即ち鵬齋の歿年よりは四年前の著なり。

經文を綴りたる戲文類は寶永頃にも見えたが、安永天明に至りては落首や落書に迄も經文を綴りて取込む事流行したり。鵬齋が本書を作りしも斯かる流行を逐へる一時の興なるべし。鵬齋は世に知られたる如く、當時の官學派よりは異學者として疎外もしくは壓迫せられつゝも、下町學者の重鎮としての勢力を有し「金杉の醉先生」の名によつて威望聲譽群儒を凌げり。彼れや其性豪宕にして飄逸、遊惰荒怠のみ事とする俗人中にありて悠々自適し、所謂通人粹客と交遊せり。時の巨畫匠として知られし文晁及抱一をして競つて其戲作の爲めに執筆せしめしによりても、彼れの名望と其道樂氣の強さと窺ふに足るべし。

本書の内容を観るに、長行即ち經文としての本文は、之を音讀式に讀誦するに於ては、殆ど普通の經文と異ならず。木魚を敲き鉦を鳴らして之高唱せんには、誰か其道樂經たるを知らんや。然れども短行即ち偈に至りては、如何に巧妙に讀誦するも、自然に屢々其聲調に滯滞を來すべく、滑

かには讀下し難きものあり。蓋し偈は四言と五言とを以て通例とし、之を讀誦するや自然に圓轉滑脱の聲調を發揚するものとす。されば念珠を爪繰る老和尚の之を高唱するに接すれば、翁媪等は不知不識の間に有りがたさを感じて合掌禮拜す。然るに本書の偈即ち短行に至りては七言式なるが故に、甚だ讀みづらく、随つて其調子も妙ならず、振り得て未だしも云ふべき歟。然れども又一方より見れば、その餘りに本物らしくならざりし點が本書の特色ならんも知れず。わざと磊落に戯作めかして殊更に七言式を採り、しやれ飛ばしたる處を面白しとも評すべからん歟。卷頭文晁の圖に於てまた然り、阿彌陀佛の本體を酒壺とし、圓光を火炎に改めしも、雌嬰を煖むるの寓意に出でたる一のしやれと見るべし。すなはち文と畫と、兩々相對照し來れば興更に深きものあり。跋文の渡邊榮は鵬齋門の人ならんと思へど詳かならず。

(原本林若樹氏藏)

自筆本之部

奈良繪本阿國歌舞妓圖

二十八枚

〔現存の著明なる歌舞妓の古圖〕 歌舞妓草紙の世に著はれたものは『骨董集』所載の阿國歌舞妓古圖と稱するもの、徳川侯爵家の歌舞妓草紙畫卷、中村福助氏の奈良繪本歌舞妓草紙と、爰に説明しやうとする京都帝國大學圖書館所藏のものである。各々その特色を異にして居るが、骨董集に載せられたものは三原繁吉氏の珍藏に歸し、繪が二段と詞書一段とが残つたゞけで、長いものの斷片に過ぎないけれども、山東京傳によつて名高くなり、且つこの奈良繪本の歌舞妓草紙を研究するには最もよい参考品となるものである。徳川侯爵家所藏のものは天地一尺二寸二分に長さ五丈三尺一寸に及ぶ長卷で歌舞妓草紙中最も立派なものである。中村福助氏の草紙は天地一尺五分五厘幅七寸五分の奈良繪本で、これもまた本書との比較研究に大切なものである。

〔歌舞妓に就ての研究〕 さて本書が世に紹介されたのは、大正三年に京都帝國大學圖書館が買入れた時、文學博士藤井乙男氏が雑誌『藝文』(同年七月發行)にその考證を掲載せられたに始まり、また『大日本史料』(第十二篇)にも載せられた。然し本會の複製は原本そのまゝを再現したのであるから、趣味の上からも研究の方からも最も貴重な資料といふべきである。

そも／＼歌舞妓は徳川初期より發達して國民の娛樂として最も大切なもの、一つとなり、且つ今日般盛を極めて居る演劇のもとであるから、その起源に就いての考證も行き届いて居さうなものだが、實は斷片的の研究で明確を缺いて居る。京傳の『骨董集』に載せられた阿國歌舞妓古圖考は最も有力なものであり、近くは文學博士坪内逍遙氏が雜誌『錦繪』に連載せられた「浮世繪に現はれたる歌舞妓劇場の内外」と題する論文中その二十三號に可なり委しい説明がある。これまで書かれたもの、内、最も該博に考證せられたものである。また藤井乙男氏の『藝文』に載せられた『歌舞妓草子』と題する一文にも起源に就て有益な考證がある。その他阿國歌舞妓に關する史料を博く探つて集めたものでは『大日本史料』第八編之一に如くものはない。

〔民衆藝術の要求と歌舞妓〕 さて諸説を綜合して見ると、出雲國の阿國といふものに始り慶長年中から榮えたといふことに歸着するのである。その間には種々の臆説があつて、年代も古きは永祿年間に歌舞妓のあつたことをいひ將軍義輝や信長もこれを見たと傳へ、秀吉秀康なども引き合に出され、或はお國が宮中へも召されたなど、いはれるが、果して何れを眞とすべきであらうか。またお國と稱したものは一人でなく、二代も三代もあつたらうとの説もあるがこれは傾聴に値する。要するに歌舞妓は近世初期に於ける社會文化の變異により民衆藝術の要求から起つたもので、その間にお國の力が與つて最も大きかつたであらうが、その起源を輕々には定められない。恰も浮世繪の元祖が岩佐又兵衛と斷定することの出来ないのと同様であらう。

ともかくも慶長年間には阿國歌舞妓が盛んであつたことは種々の書物の上で證明される。『慶長見聞録案紙』には、今年春より女歌舞妓諸國へ下るとか、諸國に女歌舞妓出來候へどもなど、あるにみても、女歌舞妓が都から地方へ出たことが分り、又『當代記』には慶長八年四月の條に歌舞妓のことを記して、歌舞妓の座いくらもありて諸國へ下るとあるにみれば、『慶長見聞録案紙』にいへるも、八年頃のことかも知れぬ。この時既に女歌舞妓が普及せんとして居たことが分る。

〔本書の傳來〕 かやうにして新時代の享樂の種となつた女歌舞妓が繪畫の上に表はれたのは當然のことである。吾人は曩に歌舞妓圖として注目すべきもの、四點を挙げたが、これは偶々遺存したものであるから、當時にあつては定めし數多の歌舞妓圖が作られたことであらう。然も本書の如きは、その内にも面白いもの、一つである。

これは複製品の示すやうに、横綴の奈良繪本で、原本は粗末な袋に入れてあるが、その裏にこの書の來歴が記されて居る。即ち「嘉永三年きさらきの頃啞小路にすめる近佐なるもの古き反故あまた持來りぬその中より數百年を経し古券の類ひ種々撰出して留め置ぬ。ふるき事の慕はしきわざにこそ。この歌舞妓のふみもその中なりけり」とある。書いた人は青々齋といふが如何なるものか明かでない。それが大正の聖代に京都帝國大學圖書館の有となり、本會の複製する所となつたのは喜ばしい次第である。

〔歌舞妓圖の研究〕

さて次に考究しなければならぬのはこの書の製作年代である。いま的確な

時を定むることは出来ないけれども、詞書を見ると、阿國と名古屋山三郎の亡霊とが問答する條がある。傳ふる所によると、名古屋山三郎は三左衛門とも傳へられ、晩年九右衛門と改名して作州津山の城主森忠政に仕へたが、慶長九年に同僚の井戸宇右衛門と争闘して斬り殺されたといはれて居る。この傳説が眞であれば、名古屋の亡霊出現を云々したのは慶長九年以後でなければならぬ。さうして阿國歌舞妓が世に持囃された折柄その相棒である名古屋が殺された事實を脚色してその亡霊とお國とを問答させ、世人の興味を惹かうとしたのは、その事あつてより餘り多くの時日の經ない内と見るのが至當であらう。坪内博士は慶長十二年以後に畫かれたものであるらしいと述べられた。なほこの問題に就てよい参考となるものは三原氏や中村氏の珍藏にかゝる歌舞妓圖である。三原氏のは挿畫二圖詞書一段だけの斷片であるが、その詞書を本書に比べると、第七段の「いかにお國に申し候これははや古臭き唄にて候程にめづらしきかぶきをちと見申さう」といふ所より其詞書の半に至るまでにて文章は全く同じである。されば此二者は挿圖を異にせる同じ詞書の別本なることは疑ひない。また中村氏所藏のものを見るに詞書は全くかはつて居るが熟讀すると、本書に見ると同じやうにこれにも亦亡霊が出て居る。惟ふに阿國歌舞妓が新時代の趣味に適して、その發展の最高調に達した時、阿國の情人であり、その協力者でもあつた名古屋山三郎が、非業の最期を遂げたとすれば、これを脚色して、更に歌舞妓に人氣を集めやうとしたのは、正に禍を轉じて福としたのであつて、恐らくこれに人氣を得たのであらう。本書及び三原氏所藏の詞書が亡霊出現を骨子とし、

また中村氏のものにも亡霊が出るとすれば、當時この脚色物は世人に深い印象を與へたものに違ない。従つてそれが繪にまで畫きあらはされて、繪本になつたものだと思はれる。然かも中村氏の詞書の中には次のやうな言葉がある。「さればふしぎの事あり一むかしの事かとよ、なごやさんと申しなまめいたるいろこのみのおのこあり」云々と。こゝに一むかしとあるからは、或はこの詞書は名古屋の死後十年も經て作られたものであるかも知れない。然らば慶長末年のものと考えられる。本書が果して中村氏所藏のものと製作の時を同するか或は前後するか明かではないが、末段の詞書を見ると、阿國を神のやうに尊敬して居る。即ち「よく／＼物を案するに、この阿國と申すは、忝くも大社の假に現れいで給ひ、かぶき踊を始めつ、衆生の惡を祓はんため、かゝるかぶきの一節を、あらはし給ふばかりなり、あら難有の次第なか／＼」と結んで居る。こゝで考ふべきは阿國といふ女歌舞妓をかくまでに偉大なものとして稱揚するには相當の歳月を必要とすることである。

坪内博士もこのことに就て次のやうにいはれた。「或は此作は山三はもとより阿國みづからも、既に餘程前に廢業したか、もしくは死去した時分に出來たのではないか？二人とも極めて人氣があつたのだから、死後久しく此作がお國歌舞妓の興行目録中の呼物となつて行はれてゐたのではなかつたか？」と。この説は如何にも尤と首肯される。かやうに考へれば繪にあらはれた阿國歌舞妓に亡霊の出ることや、また阿國を神の權化とした理由も分る。徳川侯爵家の歌舞妓草紙を普通に阿國歌舞妓のやうにいふが、あれは采女といふ者の踊であつて、恐らくお國の繼承者であらう。従つてそ

の畫風の上から云ふても正に畫卷は年代を更に下らなければならぬ。要するに歌舞妓の隆盛なるに従つて、その模倣者は續出したことであらう。それ故單に阿國とあつても、それは必ずしも一人ではあるまい。二世三世もあつたのだらうと思はなければならぬ。本書にかゝれて居る阿國は恐らく後繼者たる阿國ではあるまいか。さうして前述の色々の理由で慶長末年頃にお國に關する物語の詞書が出来たとすると、奈良繪本にあらはれたものの中には、慶長の末から元和頃に作られたものが存在することになる。本書も恐らくその頃に作られたものであらうかと思はれる。

〔本書の價值〕 以上述ぶる所によつて遺存する有名なる歌舞妓圖に就ての比較をしたが、終りに本書の價値に就いて一言したいと思ふ。元來奈良繪本は繪卷物を綴ちて冊子とした形で披見に便ならしめたものであらうが繪は概ね粗末である。然るにこれは頗る巧な繪で奈良繪本としては稀にみるよいものである。まづ構圖が面白い。披見して行くとそれ／＼の變化があつて間々櫻や柳などの自然物を寫して風情をそへて居る。詞書の書風も美事である。さうしてまた歌舞妓圖としては遺存するもの、内、中村氏所藏のものと竝んで古く研究資料としても趣味の上から見ても最も貴重なものである。(此稿藤懸靜也氏執筆)

(原東京都帝國大學圖書館藏)

戲 卅六歌撰櫓色紙

牛紙本 一冊

本書は瀧澤馬琴が自筆の稿本なり。卷末に「江戸曲亭馬琴編撰、畫者歌川豊國、寛政十三辛酉年

春正月發行、江戸通油町葛屋重三郎板」とあり。されども遂に開板に及ばずして草稿のみ、保存されしものなり。脱稿は「寛政十二庚申年六月上旬稿」と裏表紙に記しあれば、前年夏の著述なるべし。すべての體裁を芝居本に模倣して、最後の頁に「千秋萬歳無事叶」と戯れかけ、やがてまた之を抹殺して眞面目顔をなせる所に、馬琴の性癖の早く既に躍如たるを見る。見返しに「小倉色紙百人一首の頭書、公任卿の三十六歌仙に擬したれば云々」とありて、江戸三座の俳優三十六人を歌仙に見立てたり。但し其の題歌又は詠歌を添ふるに至らざる草稿なり。何故に刊行に及ばざりしか、聊か不明なり。一説に、其趣向が河原者の俳優を高貴の歌人に擬したるによれりといふ。階級制度のむづかしき時代なれば、さもあるべくや。既に元祿六年開版の『芝居百人一首』が其筋の忌諱に觸れ、時の書物奉行脇部甚大夫より鐵槌を下され、『四場居色競』と改題して、漸く絶版の厄を免れし前例もあり。尙當時より百十餘年を経過せし寛政末にても、やはり俳優は河原者と見下されたるなれば、同じく絶版の虞れはありしなり。隨て著者も版元に強ひかねて、刊行せざりしなりといふ説事實なるが如し。馬琴は見事此『櫓色紙』にて世の喝采を博すべき自信のありしか。そは見返しの頁に「洩れたる江戸役者もなからず、若し見盡さずして残り多き見物は、五十人一首を待たるべし」と、續編まで豫告したるに暗示さる。

此書を馬琴の起稿せしは、其齡三十四歳の時にして挿畫を頼むべく指定せし豊國は、初代即ち横町豊國なり。當時老いたりととも豊春あり。また似顔畫を以て聞えし勝川春好あり。勝川春英もあり。

然るに横町豊國を選びしは、寛政十年に『東海道娘敵討』を描き絶妙と稱せられ、一躍大師匠豊春の墨を摩し、似顔畫もまた春英を凌ぐ流行兒にして、其筆富麗なりしに依りしならんか。然れば豊國に對する注文書は尋常の畫工に對するよりも恭敬の意を致したりき。此頃の習慣として、筆耕へ廻す文字は、畫工の任意なりしを以て、一流の畫工の許には、其鼻息を窺ふ筆耕屋の多かりきといふこと此注文書を見ても、首肯し得らる。

その内容は未成品なり、かたぐ取立て、いふほどのこともなければ、演劇一渡りを知るべき業とはなるべし。又一面よりは馬琴が自筆に書流したる草稿中の草稿なれば、彼れが草稿に抹殺訂正の殆どなく、筆耕入らずと言はれし世評の實なるを見るに足る。そこに刊本以上の價值あり。

(原本岩崎文庫蔵)

胸算用嘘の店卸

中本 一册

原本は葛飾北齋自筆の草稿本にして、表紙に「塵劫記由来、三五五丁」といふ割書きありて、其下に「胸算用嘘の店卸」と筆太に題し、左隅の下方に「時太郎可候畫作、西村屋與八」又その上に「稿本渡し二百七十七匁」と書きたるもの。即ち享和三年に刊行せし黄表紙三册物の草稿なり。

其頃美濃判二つ切りにて『塵劫記』と云へる通俗用の算術書行はれたり。本書は之に因みて滑稽の趣向を立て、自由に洒落しゃらくのめしたるものなり。書き入れの細字すら版下入らずと稱美されたりし曲

亭馬琴のそれにまされる能書なる上に、とりわけ畫は流石に彼の北齋一流の達筆とて、其儘版下となるべき面白き圖柄幾つもあり。中には刊本のそれよりも面白く見らるゝもあり。草稿本中稀に見る所の入念なる稿本なり。總じて洒脱に描き流したれば、雅致に富みたり。

さて稿本と刊本とを仔細に比較し見るに、稿本の表紙には「西村與八」とあれども、刊本の方には「仙鶴堂梓行」とありて、鶴屋喜右衛門の出版となり居れり。按ふにこれは稿本成りて後版元を變更したるに外ならざるべし。更に内容を檢するに、畫面の模様替へとなりたる部分少からず。人物にも、背景にも増減あり。或は人物の位置、器物のあしらひなどを改めたる所もあり。總體を『塵劫記』の割算法の二段より九の段までとし、其間に田畑の間數、諸物の積算、鼠算、俵算などを挿み、種々の事件、人物を配合して綴りたり。北齋が時太郎可候といふ戲作名にて畫と作とを兼ね、黄表紙に筆を染めしは寛政の頃よりにて、二代目依宗理また群馬亭と畫號せりし時を初めとす。彼れが宗理の號を門人宗二に譲りて北齋と號せしは寛政十年なり。北齋の名の世に高くなりたる文化の初めには、最早戲作などに従事する暇はなかりきと云へば、此書の如きは彼れが漸く戲作に筆を絶たんとしたりし、頃即ち彼れが畫筆の洗練期に達したる四十二歳の作なり。さればこそ、表紙の書き入れに「稿本渡し二百七十七匁」とあり。斯かる稿料をも、版元は之を支拂ふことに躊躇せざりしなり。こは當時の稿料としては決して廉なるものにあらず。今假りに之を六十匁一兩として算せんに參兩貳分貳朱弱となるべし。以て版元の著者に對する待遇を窺知するに足らん。尙北齋の戲作に

は時太郎可候の外に、是和齋、錦袋舎、魚佛、白山人等の別號を用ゐたるものあることは『戲作者年表』等に見えたり。

本書の複製は精巧なる玻璃版を用ゐて肉筆其儘を傳へ得たと信ずれども、上中下十五張のうち、上卷の二と下卷の五との二張に脱落あることを憾みとす。

(原本三村竹清氏藏)

竹齋老寶山吹色 刊本添付 中本 一册

本書は築地善交著、黄表紙の自筆草稿本なり。此草稿本には序文なく、著作の年代も不明なれど、對照の便宜上末に添加せる板本には序文ありて、寅正月と見えたり。『日本小説年表』に據れば、寛政六年の部に「竹齋老寶山吹色、築地善交作、北尾重政畫」とありて其傍らに「竹杖爲輕、築地善交は萬象亭の戲號なり」と記し、通油町鶴屋の開板なり。然れば「寅正月」は寛政六甲寅の年に當れり。

築地善交は二代目風來山人、森島中良の戲號なり。中良は蘭法の幕府醫師桂川甫周の弟にして桂林と號し、平賀源内の門に入りて萬象亭を讓られ、後に二代目風來山人、二世天竺浪人、二世福内鬼外とも稱したり。又源平藤橘の假名にて院本を作れり。狂歌々人としての竹杖爲輕の名は最も廣く世に知らる。蘭學の素養もありしかば、往々其著に横文字を挿入し、表紙貼外題の枠模様にも和蘭文字を用ひたるものあり。本書の如きも刊本には外題の枠模様と和蘭文にて蘭語を列ね異彩を放てり。築地善交の名を戲作に用ゐたるは『竹齋老寶山吹色』の開板寛政六年を以て初めとせしことは

『青本年表』等に據りて知らる。同書の天明四年の部に「竹杖爲輕三十三歳。萬象亭三十三歳」とあるは共に同人にして、猶十年後の寛政六年の部には「森羅亭萬寶、即七珍萬寶三十三歳。萬象亭爲輕四十三歳。築地善好即竹杖爲輕なり本年四十三歳」とあり。『戲作者年表』または『名人忌辰録』に據れば、七珍萬寶は竹杖爲輕の門人にして通稱福島屋仁左衛門と云ひ、森羅亭を名乗り、三世を繼承せりと見ゆ。

刊本の畫工の名は不明なれども、或は北尾重政歟。寛政年間は彼れの盛時にして、讀本、草双紙類の畫を最も多く描きし頃なることは『浮世繪類考』其他諸書に見えたり。それらと本書の畫風とを比べ見るに頗る相似たれば、之を重政の畫とする必しも不可ならじ。本書の内容に至つては、戯内竹齋の假名にて引札に擬して綴りたる口上體の板本の序文に、「未曾有の料治種々工夫仕候間御望の御方様は御賑々敷御光駕云云」と見えたる如く、醫師竹齋が頓智滑稽的の治療畫しなり。竹齋の名は古くより頓智に富み滑稽に長じたる貧乏醫者として名高く、既に松尾芭蕉も其『七部集』に冬の日の題にて「こがらしの身は竹齋に似たるかな」の句あり。又、竹齋の名を冠し滑稽を主としたる者は、天和二年刊行の『竹齋物語』あり。江戸時代の滑稽文學の先驅の一たり。續いて『上り竹齋』あり、『下り竹齋』あり、又謎を主とする『新竹齋』などあり。いづれも筋を旅行に取りたれども、主人公はいつも眞の竹齋を其儘に滑稽なる醫者となしたり。然るに本書は從來の筋を離れて、難病治療の方面に新意匠を開展したる點に興味あり。按ふに彼の歌川國芳が戲畫にて絶板の厄に遭遇せし『姉小

路の難病治療の圖』の如きは、この『竹齋老實山吹色』の趣向を踏襲せしに過ぎざるべし。

本書は例の如く精巧なる玻璃版を以て複製したる上、特に板本をも添へおきたれば、草稿本と對照して古作者の用意を玩味せらるべし。

(原本林若樹氏藏)

參海雜誌

中本 一冊

本書は第一期刊行の『遊相日記』に後る、こと二年、天保四年四月十五日に華山が三原を出發し、三河沿岸の漁村を巡遊して、堀切村より西南伊良真、日出に接する縦横一里の大沙漠を踏査しつゝ、周回纒に里餘なる一孤島、伊勢の神島に渡りし時の自筆繪入日記なり。

此行は三原藩の系譜及び三河誌取調の公用を兼ねたる旅行なりとあれども、邊海の防備に専ら留意せし當時なれば、特に沿岸を踏査しつゝ、危険を冒して大海の孤島に渡りしには、何等かの別目的ありしならんと想はしむ。然れども行文は流暢なる紀行文に過ぎずして、黒船の來去を尋ぬる外には、毫も時事に及べる跡なし。而も圓轉滑脱にして叙景に自在なる筆は、能く寫生圖の不足を補ひてぶつ附けに書き流したる手控にして猶斯くの如きかと、巨匠の力量に推服せしむるに足るものあり。殊に和地村の醫福寺に藏すといふ、木曾義仲の祐筆たりし僧覺明の手跡と稱し來れる、六百卷の大般若經に對する考證の如きは、一の史的考證資料とするを得べし。『桑華蒙求』、『本願寺記』等に據れば、覺明は元南都興福寺の僧にして、治承年間重仁親王の令旨を奉じて平家追討の企に參與

し、淨海の怒りに觸れて遁竄し、後、木曾義仲に隨身して侍史となり、義仲亡びて浪々所々に潜伏中、この大般若經六百卷を筆寫したりと傳へたり。伊良真、神島等の風俗の如きもまた、好古家の一研究資料たるべし。

就中風景及び風俗等の寫生圖に至つては華山獨特の輕妙にして洒落なるもの、氣韻高く雅趣ゆたかなり。而して其數は『遊相日記』のそれに三倍して五十五圖の多きに達す。之れに臨めば坐ろに快哉を叫ばしむ。加ふるに『遊相日記』に比して密畫頗る多きは、最も好事家を喜ばしむ。

此『參海雜誌』の原本も曩に複製したる『遊相日記』の原本も同一形式、同一紙數にして薄葉紙九十三葉を綴ぢ、藥袋紙を表紙に用ゐたり。(複製本には卷末の白紙を削除したれば、紙數同じからず。)會員米津仲次郎氏の談に據れば、此冊子はもと松崎慊堂が日記の用に供せんとて考案したるものに係り、記入法を一年十二月廿四候に象り十二行廿四字詰となし、紙數を九十三葉としたるは、一日一葉と見積りて春夏秋冬の四季即ち三ヶ月毎に一冊宛を配し、之に數葉の豫備を添へたるものなりと云へり。華山が三宅坂の家より遊谷羽澤の慊堂の邸へ質問に赴きし際、慊堂より此日記用の冊子若干を華山に贈りたりといふ。此形式の慊堂自身の日記は、今も靜嘉堂文庫に保存せらるると云ふ。本書を複製するに當り、彩色せる圖面には原本の如く淡彩を施せり。卷中の白紙も、必要と思はる、部分は之を添へ置きたり。

(原本宮本仲氏藏)

惺々曉齋繪日記

半紙本 一冊

六四

本書は河鍋曉齋が自筆の繪日記なるが、彼れが日記用紙に藍梓を摺込みしは、明治十八年以後なりと云へるより推し、又此書の日附「十二月一日」の干支より推せば本書は明治二十年の繪日記たること明かなり、何となれば明治二十年十二月一日は恰も庚子に當り、而して彼れの歿せし同廿二年までに他に十二月一日の子の日に當る年なければなり。

此書に關する説明を故翁の女曉翠女史に就いて求めしに、曰く、亡父が繪日記を物しはじめしは維新前よりの事らし。明治十八年に藍梓の用紙を用るしまでは、無造作に綴ちたる半紙二つ折の一頁を一日分に充てたり。酔中或は病中と雖も、曾て忘ることなかりしかば、悉く保存せば數百卷に達すべかりしを、一ヶ月分を物し了れば、それを反古の堆裡に投じおきて顧す、若し乞ふ人あれば惜氣なく與へたりき。後には豫め約束して持去りしも多く、遂に河鍋家には只の一冊も保存されざるに至れり。就中維新前後の分は、時世が時世だけに、其畫面にも興味深く、描き方も丁寧にして彩色まで施しありて、當時の社會相の一面を浮動さするに足るものありき云々。

尙卷中の人物に就いて、女史は曰ふ、「東助」は本石町の居酒屋として有名なりし力持の東助なり。又其前に魚類を並べたるは、曉齋平素蟹、牡蠣を嗜好せしより、東助が魚河岸へ買出しに赴く毎に新鮮なる物あれば、持來たる例なりしかば、此日も亦持參せしならん。「鹿島様庄君」は新川新堀の

島鹿清兵衛が手代庄太郎の事なり。「鬼面」は經師屋高須平吉なり。其顔貌の鬼面に似たりしより鬼平と綽號されしなり。「辻」の字の提灯を持ちたるは、辻某とて、常に相談の纏まりたる事なきより「小田原く」と言はれたるを諷したり。「上野利津院二枚進上」とあるは、日課に菅公と觀音の像とを一枚づつ、半切に描きて、一ヶ月に都合十枚づつ、菅公像は平河、龜戸の兩天神へ、觀音像は淺草の傳法院と上野の護國院とへ寄附し、残り十枚づつ、を有志者に頒ち居たりしを、此日津院へ二枚納めたるならん。又「岩本」とあるは書畫屋なり。又五日の所、「車上の人」は曉齋自身なり。其大酒は人の知る所なるが、彼れは如何に泥酔し居たりとも午前二時には必ず起き、朝七時までは注文の板下畫を描き、さて八時の朝餐に一陶を傾けて畫絹に向ふを例とせり。然れども畫債を督促に来る人酒客なる時は、對手を擇ばず、終日酒浸しとなれりき。されは榛原の如きは、常に彼れを自宅へ請じて執筆せしめき。此畫面は、即ち請せられて仕事に赴く所なり。「龍頭女」は其女豐子即ち曉翠女史の娘盛りなり。女史は明治元年の生れにて辰年なればなり。コンデエールは門弟にて、毎土曜、クリンクリンも門弟にて、毎月曜、出稽古に赴きたり。「いせ辰」は板畫を外國へ輸出して莫大の利を占めし商人。「丸にい」の人物は今川橋角にありし澤村屋といふ繪双紙屋。「銀座はる、よし」は母子にて一六に稽古に來りし門弟。「鎧武者」は人形町の繪双紙問屋具足屋。「異形の彌太郎」は鹿島の店員にて花柳病に罹りて後に鼻柱を失ひし男。「烏天狗」は門弟らし。廿二日の「供餅」は、此日辨財天の緣日にて、河鍋家佳例として引摺餅を搗く日なり。廿七日「周よりかはせ」とあるは、長男周三郎(曉

六五

雲)より爲替の來りしならん。晩年には唐畫の研究に熱中し、意に適へるものあれば、手許の何物をも抛ちて、それと交換せり。末尾の光琳、月山、北齋の書幅等を擴けたるは、何物とか交換中の有様なるべし、云々。

すべて不用意の間に豪放の氣を吐きたる畫致面白し。仔細に書入れを參酌せば、三十餘年前の風俗を追懐する資たるに足らん。複製は例の玻璃版を用ゐ、着色しある箇所は筆彩色を以て補ひたり。表紙の文字は三村竹清氏の筆なり。

(原本林若樹氏藏)

洗張浮世模様

半紙本 一冊

本書は故久保田米僊氏が漫畫風に、面白をかしく描き集めたる自筆小紋帳の遺稿なり。

米僊は京都の明治の畫家中に於て故實通と才筆とを以て、推稱せられし一巨匠なるのみならず、時の文人墨客中の好事家又粹人として名高かりき。其多年の蘊蓄の餘技として、次第に變遷し來る社會風俗及流行の器具等を巧みに取入れて、興に乗じ筆に任せて戲畫式に描きたるもの、即ち此『洗張浮世模様』の一冊なり。此種の戲畫式小紋帳の先例は、既に天明六年の序文を添へたる山東庵京傳の『小紋新法』あり。米僊のは該書に倣ひたるものなることは、本書の序文中に「山東庵の翁がものせる漫畫の掣に倣ひ云々」とあるにて知るべし。著者が本書を揮毫せしは其未だ京都に住せしころ、即ち其東上前にして霸氣の滿々たる明治十九年の夏なりしが如し。

『洗張浮世模様』の前編上の巻と稱するもの一冊は、京傳遺稿、隣子編輯と標記して、京都の博成社より明治廿二年に發行し居れど、該書は京傳の『小紋新法』の三百餘圖中の前半を、洋紙を用ゐて石版色摺に附し、模様の略解中に處々評語を挿み、原本『小紋新法』の序文をも其儘に轉載せるものなり。而して其表紙には續々出版の文字も見えれば、續いて『小紋新法』の後半をも下の巻として出し、且つ米僊自身の意匠に成る本書を其續編として出版すべき豫定なりしならんか。然れども時機熟せずして長く筐底に藏しおきたるもの、如し。此の原稿今は著者の嗣米齋氏の秘藏に係る。よりて其許諾を得て茲に玻璃版に附せり。これに依りて著者の自身の奇警なる着想を窺ひ得ると同時に、其の自在なる筆力を味ひ得べし。

(原本久保田米齋氏藏)

稀書解説第一編終

附 録

特別 刊行 明和劇場圖 中村座

一 軸

此圖は木板畫中に於て最大のものとして推賞さる、俎版よなばんといふものにして、幅は二尺、長さは四尺餘なり。明和年間に成れる手彩色の劇場全景圖なり。

何故に俎版と稱するか不分明なれども、五月幟の武者繪などに同様の例はあり。但し劇の畫、殊に劇場内外の全景を描きたる斯くの如き一枚摺は、古來名のみ好事家間に噴々せられて其實物の知られざりしを例とせり。數年以前某浮世繪商店に『東榮戲臺之圖』と題したる軸仕立の劇場全景畫一幅あり、時價金五百圓と號したり。好事家垂涎措かず、争つて購はんとせしが、遂に某地の紳商の手に落ちたりと聞けり。然るに我松廼舎文庫には夙に俎版二種あり。一は中村座の圖にして蜀山人の添書きあり。二は曲亭馬琴が舊藏に係る市村座の圖なり。共に『東榮戲臺之圖』と題して、畫風圖樣共に殆ど同様ながら、中央なる舞臺面の人物と木戸看板の文字は異なれり。實に珍中の珍なるもの。おそらく天下二三品ならん歟。曩に此市村座の圖のみを甚だ粗末なる石版摺にて複製せし人ありしが、著るしく寸法を縮め三枚の版面に分ちて唐紙に刷りたるものにて、雅致乏しく、原圖との隔たりの餘りに遠かりしを遺憾とせり。併しそれすらも今は知る人少し。弊堂茲に於て所藏者松廼

屋主人の許諾を得て、兩圖中明かに傑れたりと思はる、中村座の分を原圖通りの大木板を以て複製すること、せり。而して特に手彩色其他に努力と工夫を凝し、幾多の苦心を経て漸く原版に比して遜色なしと自信し得るものを製出せり。

俎版に就いての細説及び筆者の誰たるかに關する考證等は之を他日に期し、爰には本圖の圖解のみを略記すべし。原圖の箱書には「明和劇場圖」とありて、別紙に添へたる如き蜀山人自筆の添書きを畫幅面の上部に附記せり。即ち中村座の全景なり。此俎版に就いては、嘗て伊原青々園氏が「歌舞伎」第百三號に解説せられたれば、今其所説に據りて説明せんに、舞臺は破風造りにして且つ橋掛りあるは、それが未だ能舞臺の形式を脱せざりし頃の構造なり。別に花道もあり、又左右の大石柱に、狂言の大名題と小名題の看板を掛けしも當時の風習なり。舞臺背面の高所に在る見物席は當時「羅漢臺」と稱せられしものなるべく、囃子方の左の方の簾の中に在るなども、現今とは反對にて、京阪のそれと同じ。人物中、馬上なる團十郎の將門は「暫」の受けに當り、團藏の金時は押戻し、八百藏の定光は「暫」の役に當れり。馬の手綱を取る若衆形は辨藏の頼信、中央、緋の袴を着けしは幸四郎の酒香童子、右の方の蛇體は三浦右衛門の山田の蛇なり。又土間は、花道の外に、右にも歩み板ありて、近代と異ならざれども、枳形なし。今の仕切枳は明和三年に繩張りとなり、同九年の新築に初めて方四尺五寸を一枳となせしなり。又左右に上下の棧敷あり、下棧敷に鶉籠の如く横格子の入りたるは、今もウヅラと云ふ名稱を残す起因たり。尙表看板の處を見るに、櫓下の直下の繪看板

は、俗に櫓下と稱するもの、其左方に掲げあるは、淨瑠璃看板、大名題看板、小名題看板にして、大名題看板は位置も形も現今とは相違せり。又右の方に掲げあるは大詰看板にて、更に其右はワキ狂言の看板なり。又鼠木戸が左右に在るは近世に同じ。木戸の中央に巻き物を持てる男と聲を發し居る男は即ち木戸藝者なるべく、鼠木戸の右は東棧敷の入口、左の簾の上に在るは仕切場なるべし。

第一期 亂曲揃解説補遺

『稀書解説第一編』に記したる如く『亂曲揃』の原本には蟲喰ありしも、其際は別本を求むるに由なかりしかば、僅に缺字等を補ひて足れりとせざるを得ざりしが、偶々水谷不倒氏の所藏中に加賀椽の『道行集抄』と『亂曲集抄』とを併せ收めたる『法性寺笠』といふ一本あるを知りて、之に據りて新たに校合せしに、ニヶ所の誤ありしを發見せり。即ち八張裏一行目の初めの、「なれあいおいつくしま」は「**お**いつくしま」の誤なり。又十張裏一行目の下端の不明文字は、「さめて **のぢらひ** きよ」なり。共に茲に訂正す。

次に前掲『法性寺笠』には、道行集目錄の下端に「ふし付しやうの事」と小題して譜號の一々を説明しあり。こは頗る調法のものなれば茲に抄録す。

一とあるはまつすぐにかたるしやう也。

とあるはながきはもつしやう也。

とあるはさけるしやう也。

とあるはながきはさけてもつしやう也。

とあるはいれるしやう也。

とあるはおすしやう也。

とあるは中におすしやう也。

とあるはつよくおすしやう也。

とあるは入れてきつくおすしやう也。

とあるはふるしやう也。

とあるはもつてすこしおすしやう也。

とあるはのむしやう也。

とあるはもつてすこしはねるしやう也。

とあるははつてはねるしやう也。

とあるははやめるしやう也。

とあるはうくといふ心也。

又『稀書解説第一編』の十九頁一行目末より二行目の初めにかけて「頭註を加へたる形式は他に類

例を見ざるものなり」とある、形式にの下「加賀椽もの以外には」の九字を脱せり。

尚亂曲といふことの解に就いては、貞享四年板の『舞樂大全』に『亂曲の事』と題して左の如き解あり。曰く「まづ諷をうたふに祝言、遊見、戀慕、哀傷をいふ、亂曲といふは一番の曲舞の中に祝言、遊見、戀慕、哀傷の吟入り亂れたるものなり、さるによつて亂曲と云ふ、又かくの如く四音入り亂れたるによつて、初心の口にかなひがたきによつて蘭たる曲と云ふ心にて蘭曲とも書くなり」と。

第二期計畫發表に際して

一 書籍複製の四大困難

稀書複製會は豫定の期日を一回も過たず、茲に第一期を終へて將に第二期に移らんとするに方り、更に同好諸君の同感を乞ふ所あらんとす。

抑々書籍複製の業たる一見容易なるが如くして實は極めて困難なり。第一に、底本とすべき完全なる善本の容易に獲られざると、第二に、精刻なれば精刻なるほど、稚拙なれば稚拙なるほど、古鑿の眞を傳ふるには最も老熟なる技術家の苦心を要すると、第三に、着彩は筆彩色と色摺との別なく時代の自然的變遷に由る沈靜溫雅なる古板畫の色調を與ふる事の甚だ困難なると、第四に、用紙の種類に由りては近年全く製造を中止し、或は縱令存續するも疲弊の餘供給のとだえ勝ちなると、且洋紙の原料を混入して純楮皮紙の殆ど獲難きと、其他事に當りて大小の難儀一々數ふべからず。此故に複製を試みるものは多けれども或る數四の例外を除きては大抵失敗に歸し、最も簡便なる玻璃版を以てするものすら技術上に細心なる注意を缺き、且用紙の選擇を疎かにし、爲に往々卑野の感を抱かしむるもの多し。世には木板ならば直ちに複製の目的を全うし得るもの、如く思惟するものあれども、鐫刻精緻に失して古朴を缺き、色彩豐潤に過ぎて古淡を失ひ、若くは裝潢の色態を銷落

せしむる用意を盡さざる爲め毫も時代々々の古味を髣髴し得ざるものあり。此の如きは千萬金を費すと雖も完全なる複製と稱する能はず。況や僅に刻字の形を模して複製の名を僭するものの如きは無分別乎無鑑識乎殆ど論ずるに足らざるなり。

二 古版複製は特種的美術也

書籍の複製は古器物の模造と同じく一種特異的美術なり。木雕のものを張抜きにて模するの不可なるが如く、張子細工のものを木雕とするも亦不可なり。おしなべて稚拙なる古板を複製するに方りて複製の理解なきものが屢々陥る失敗は、恰も後者の場合に等しきものあり。或は又古板の眞趣味を理解せざる爲め恰も腐蝕したる古銅を生硬なるアンチに模鑄して足れりとするが如き似而非複製を作りて得々たるものあり。世間滔々たる在來の所謂複製は大抵此の如き好い加減なものにして、古板の面目を汚漬するも亦甚だし。複製の業豈それ容易ならんや。

三 我が複製會の業績

我が複製會は本來牙籌を目的とするに非ざれども、又富豪の後援あるにもあらねば、勢ひ時として經費に左右せられて豫期に副はざる場合あるも又止むを得ざるなり。されども費額の許す限り最善を盡したるは、既往二年間の刊出物が其最も遺憾多きものすら在來の諸複製に比して遙に一頭地

を挺んづるに由りても知るべし。既刊數十種の中には、或は完全なる底本を得ざりし爲め、或は顔料用紙其他の材料上好適なるものを得ざりし爲めに止むを得ず多少の不完全を忍びしものあれど、其大多數は今後幾多の歳月を経れば容易に刻梓の新故を甄別する能はざるに到るべきを誇稱するを憚らず。且此中には遺存僅に一二部といふが如き稀觀中の稀觀ありて、今日複製せざる時は遠からず全く亡佚すべきを、原本通り寸毫の差異なく複製して以て同好に頒つを得たるは、亦聊か我が文化に貢献したる所以なり。

四 第二期の抱負

我が複製會は既に二年間の經驗を積みて古版の複製上發明する所少からず。其最善の用意を盡して、複製上の新生面を開拓し、以て益々文化に貢献し且益々會員諸君の満足を得すべきは今後にあり。我等同人は我が重要な古刻の將に亡佚せんとするもの多きを座視するに忍びず、又年一年古版匱乏して古文獻研究又は古書愛好の士の欲求轉た切りなるを知る。是に於て尋常一様の營利の目的を以てしては到底企て及ばざる我が複製會の事業を中止するを遺憾とし、更に進んで第二期に入りて益々貴重なる稀觀書の複製に盡す所あらんとす。既往二年間の經驗が愈々微に入り精を究め第一期以上の成果を收めて精巧なる複製本を諸君の前に提供すべきは諸君の必ず諒知せらるゝことならん。

且つ此第二期に於ては更に探訪の範圍を擴大し、從來未開の祕籍を多方面に涉りて蒐集するの計畫を立てたり。其一斑は後掲豫定書目を見て察知すべく、尙此書目以外未だ發表するを得ざるものの中に古文獻學者又は愛書家を狂踊せしむべきもの少からざるべしと信ず。また此書目中には從來既に複製せられしものもあれども、不完全なる原本に由り、剩さへ僅に刻字の跡を模糊したる如き似而非複製品は實用上にも鑑賞上にも多く用を爲さざること言を須たす。著名の稀觀書が此種の惡複製に由りて汚漬せらるゝは我等の忍ぶ能はざる所にして、縱令此等の複製何十種に及べりとも、完全なる原本の完全なる複製を作ることを主意とせる本會は毫も其立場を失ふこと無し。我等同人は本來閑人に非ず、何を苦しみて無用の業に従はんや。之を好古と謂ひ之を愛書と謂ふは抑々未なり。其至心に至りては大正の聖代に遭遇せる者の幸福を思ひ、此時に於て古文獻の亡佚を救はんとするに本づく。大方の人士庶幾はくは我儕區々の微衷を察せられ益々本會の事業を贊襄あらんことを。

大正九年六月

稀書複製會

同人 (いろは順)
市島謙吉

附錄終

林 若 吉
和 田 萬 吉
坪 内 雄 藏
内 田 貢
安 田 善 之 助
三 村 清 三 郎
主 事 山 田 清 作

15
394

三期

158 / 101
146 / 306

大正十一年六月廿五日發行

不許
複製

編輯者 山田清作
 印刷者 東京市牛込區榎町七番地
 印刷所 東京市牛込區本町三番地
 發行所 東京市牛込區富久町八十四番地
 電話 九段三四六一
 振替 東京三三〇九

終